落膽してそしてお互に曰つた、「これは私たちの罪のためなのだ、私たちは父なるフランシスに祝福されることに價ひしないのである！」そのことについて彼らがそのやうに悲しんでゐるのを見て、他の兄弟たちは修道院から下つてゆく道を送つて行きながら力をつくして二人を慰さめた——突然上の方から呼ぶ聲が聞こえた、兄弟たちが棲んでゐた高い窟から道は九折（つづらおり）に下つてゆくのであつた、そして振りかへつてみると、フランシスは彼の室（チエレ）の入口に立つてゐた。二人の旅の兄弟は跪づいた、そして顏を師の方に向けて、フランシスが靜々と畫く大いなる十字架の印をもつて與へた祝福を受けた。

彼の傳記の種々なる叙述のなかに聖フランシスの兄弟らに對する細かい感情と心の優しさと、そして彼が深く人のたましひを知つてゐたことについてのあまたの實例が保存されてゐる。彼は自らを理解してゐる故に他の人をよく理解した、そして兄弟らは屢ば彼が彼らの心を讀んでゐるやうに感じた。これは彼の同郷なるアッシジのフラテ・レオナルドについてあつたことである。永いあひだの歩行に疲れたので、フランシスは一人の同情の深い人の勸めを容れて一頭の驢馬に乘り、そして途の一部分をそれで行つた。フラテ・レオナルドは彼の側らを歩いてゐた、そしてやはり甚しく疲れてゐた、彼はひとり心に思つた、「どうしてピエトロ・ベルナルドネの息子は騎つて行く權利があらう、そして彼よりもよりよき親から生れた私が歩かなければならないのに？」彼はどんなに驚いたであらう、フランシスは馬を止て、鞍を下りてそして曰つた、「兄弟よ、私よりも貴とき家族のものである汝が歩いて行くのに私が馬で行くことはあるべきことではない！」顏を赧くしてレオナルドは彼の愛なき考へを懺悔して、そしてフランシスを扶けて再び馬に騎らしめた。[3]

これらやまた他のあらゆる試みや誘惑に對して、フランシスは兄弟らにくりかへしくりかへし三つの手段を用ゐることを勸めた——第一は祈りであつた、第二は好んで他人の意志を爲す從順、第三は主に於ける福音的な歡こび、これはあらゆる惡しきそして暗い思想を逐ふものである。この三つの指示に於てフランシスは親ら兄弟らに最良の模範をもつて先だつた。團體の長上としての地位を退いてからのち彼はいつも一人の兄弟を傍に置いて、これを彼の保護者（ガルディアン）としてそれに服從してゐた。フランシスにはそれが誰であつてもすこしも拘はることではなかつた、彼は團體に今日入つたばかりの新入者（ノヰチエ）にでも、また兄弟ペルナルドあるひはピエトロ・カッタニにでも悅んで服從した。彼は彼の周圍に滿足して、そして何人が如何なるときにか彼の好まぬことを爲したときにも、彼はたゞそこを去つて行つて、そのことに對する自然な不愉快が過ぎ去るまで祈りをして、そして再びそのことを何人にも語らなかつた。「私どもに完全な從順を敎へて下さい、」兄弟らはあるとき彼に乞うた。そのときフランシスは答へた、「一つの屍體をとつて汝の好きなところへ持つておいで、それはすこしも抵抗しない、姿勢を變へない、動かうと思はない。汝がそれを王座の上にすはらせれば、それは下を向いてゐる。汝がそれに紫の衣服を着せれば、それはたゞまへよりもなほ青ざめて見える。まことに從順なるものはまたかくのごとくである。彼はいづこに遣はされるものもまたか

くのごとくである。彼はいづこに遣はされるかを尋ねない、いかにしてこゝに來たかを問はない、彼はまたそこから外へ遣られることを乞はない、譽れを得ればますます卑くなり、讃へられゝばそただけ自らそれに適應しない身であることを思ふ。[4]「フランシスは抵抗することなくすべてのものに從屬する屍體のやうであることを願つた、そして彼のまことの兄弟たちがこのことに於ても他のすべてのことに於けると同じく彼のあとに從ふことを欲した。Per lo merito della santa ubbedienza(聖とき從順の德によつて)フランシスはかつてフラテ・ベルナルドをして、彼がこの兄弟に對して抱いた惡しき感情の罰として、彼の口の上に足を踏ましめた。[5]

あるときフランシスが曰つたことばのなかに、彼の從順についての觀念は殆ど佛陀の敎へにあるやうな性質に達してゐる。「聖とき從順はありとある肉體の意志を絶滅し、肉體をしてそれ自らに死せるものとして、たましひと隣人に從ふに自由ならしめ、しかして人をしてこの世界にてあらゆる人の僕たらしむ、ただに人々に對してのみならずありとある飼はれたるあるひは野生の獸にまでかくせしめ、よりてそれらは主のそのためにそれらに與へたまへる力をもて彼をその欲するごときものとなす。[6]」これは必らず釋迦牟尼の弟子たちが惡に抗はざらむためにむしろ身を虎に與へて裂かしめたことを思ひ出させる。そしてこの言葉に現はされたのがフランシスの偶感のみでなかつたことは、彼があるとき衣服についた火を消さうとせず、そしてけれど食を欲してきた火の兄弟に一片の毛皮を惜んだことを責めたといふ物語りにも見られる。[7]

フランシスの考へでは、平和を來らす第一の大いなる方法は、すべて個人的な意志の完全な拋棄を意味する從順、いかなる命令にもいかなる力にも完全に己れを從屬せしむることであつた。「人汝の右の頬を打たばまた他の頬を向けよ、上衣を奪ふものあらば汝の裏衣をも拒まざれ……しかして何人か汝の所有を奪はばこれを返されむことを求むる勿れ……さればおよそわれに來りて己れの生命をも憎むものに非ざれば、わが弟子となること能はず。何となればその生命を全たうせんと欲するものはこれを喪ひ、たゞわがために生命を喪ふものはこれを全うすべし。」(路加傳、六の二九、三〇、十四の二六、九の二四、)

平和を得る他のみちは祈りであつた、絶えざる、倦むことなき祈り、「間斷なき」祈りであつた。トマス・デ・チエラノが曰ふやうに、フランシス自ら時として祈る人ではなくて、「彼の存在全部が祈りに化したのであつた」(non tam orans quam oratio factus)それは恰かも彼と永遠とのあひだにはたゞ僅かに薄い壁があるにすぎず、そして屢ば彼は壁のかなたの側に讃詠の永しへの歌唱を聞くやうなことがあつた。かやうなときには彼はにはかに沈默し、そして兄弟らとゝもに在つても話しをやめて、頭巾を下げて顏を覆ふか、少なくも手で顏を蔽うた。弟子たちはそのとき彼が深く歎息しまたは何ごとかつぶやくがごとく、また恰かも何人かに答へるやうにうなづくのを見た。そして彼らは足音を忍んで立ち去るのであつた。彼らは師父が祈りするときに人に見られることを欲しないことをよく知つてゐた。アッシジの僧正はあるときフランシスの祈りのあひだに不意を驚かしたゝめに罰としてしばらく啞にされたといはれてゐる。フランシスみづか

らも能ふかぎり彼の敬虔を包まうと試みた、そして朝には他の人よりさきに密かに起きて、人に氣づかれぬやうにして、邪魔されることのないやうに外の森のなかへ入つて行つた。時として兄弟らのうちに隱れてフランシスを窺ふものがあつた、そしてこれらの好奇心の強い人々は時として大いなる光を見た、その光のなかにキリストとマリアとあまたの天使と聖者たちは姿を現はしてフラテ・フランチェスコと語つてゐるのであつた。彼が祈り果てゝ歸つてくるとき、彼の樣子には何一つ變つたものを見せなかつた、そして彼は屢ば弟子に曰つた、「神の僕が祈りのあひだに神より慰安を受けたならば、彼は祈りを終はるまへに空を仰いで、手を組んで神にかう曰はなければならない、「主よ、あなたは慰さめと美しさを天より降して私に、賤しい罪人に送つて下さいました、けれど私はいまそれを再びあなたにお返しいたします、あなたは私のためにそれを蓄へて置いて下さい！」そして兄弟らのもとに歸るときにはもとよりの同じあはれむべき罪人として自らを示さなければならない。」

孤獨の祈りのほかにフランシスはまた熱心に他の人ともにする祈りを勵んだ。「小さき花（フィオレッチ）」のなかに彼がフラテ・レオネとともに祈つてゐるところが見られる。彼がペンテコステの集會にきた兄弟たちに與へる書簡に、彼は祈禱書の祈りを唱へることについての掟を與へた。彼の身體の病弱にも係らず彼は人々とゝもに讃歌を唱へるときには壁あるひは手摺に凭れることを肯じなかつた。彼が道を行きつゝ、祈りの時刻となれば彼はそこに歩を留めた、もし馬に乘つてゐればそれを下りた。一二二三年の十二月に彼がローマから

歸りつゝあつたとき彼は降りそゝぐ雨のなかに立つて肌まで濕れ透りながら祈禱書をもつて定まつたところまで祈り終へた。「身體のみならずなましひもまたその食するときにはしづかにしてゐなければならないであらう」と彼は彼を諫めた友に曰つた。[8] 或とき彼は閑まなときに木を抉つて一つの椀を拵らへた、そしてそれが丁度でき上つたときに第三時（教會の法規で定めた一日の祈りの時間の第四、午前の九時ごろである）の祈りをする時刻がきた。祈りのあひだに彼の目は折々その完成した器の方へ滿足らしく迷つて行つた、そしてそれに心を奪はれて彼はもはや口に祈つてゐる讃美歌に殆ど注意してゐなかつた。突然彼はこの疎漏に氣がついた。そして彼の熱心さのあまり、彼は彼の心を奪つて神から離した椀をとつて火のなかに投げ入れた。

祈りはかくのごとく彼が嚴肅に考へた事柄であつた。クリスチャンたちは屢は互ひのために祈るといふ約束を濫用する、それは守られることの稀な約束である。フランシスはそのやうな風ではなかつた。ペルジアの聖ジュスチノの修道院のアバテがあるとき暇を乞ふとき自らをフランシスに羞めて、祈るときに彼のことをも忘れないでくれと乞うた。聖フランシスはこれをたゞの慣用句と思はなかつた、そこから去つて數歩も行かないうちに彼は其にあつた兄弟に謂つた、「約束したやうにアバテのために祈らうではないか」

何ごとよりも殊にフランシスは毎日ミサを聞くことを願つた。彼がどこかの町に在るときにはこれは容易なことであつた、けれど隱栖に在つては行はれ難かつた。カルチェリからアッシジまで、あるひはチェル

レからコルトナまで往く道は遠かつた。それであるからフランシスにとつて何よりもうれしかつたクリスマスの贈物は、ホノリウス三世が一二二四年の十二月に小さき兄弟らに隱者小屋に於て運搬することのできる祭壇の上でミサを讀むことを許したことであつた。このゝちフランシスは元來牧師であるフラテ・レオネ、あるひはフラテ・ベネデット・ディ・プラトにミサを讀ませた。もしこの二人がどちらもゐないときには、彼は少くもその日の福音書だけでも讀ませて聞いた、これを兄弟らの一人は正午のすこしまへに行ふのをつねとした。

平和を得る第三の手段としてフランシスが弟子たちに示したものは恒なる歡こびであつた。

「惡魔に屬するものをして首を低れて行かしめよ、我々は主に於てたのしく悅ばう、」と彼は曰つた。憂鬱は「バビロンの罪」であり、それはこの世のすてられたバベルに導びいて歸つて行くゆゑに悲しいのである。「たましひが惱まされ、さびしく憂ひにみてるとき、それは容易すく外面の慰さめや浮世の空しき樂しみに向ふ。」さればフランシスは繰りかへして聖使徒のことばを謂つた、「つねにたのしかれ。」彼は決して陰氣な顏や苦い顏を見たくなかつた——彼の兄弟らは悲しげな僞善者であつてはならない、けれど悅ばしい光の子であれ。これをいかにして爲し得るかと問ふものには彼は答へた、「心の清さと祈りの誠からかのたましひの歡こびは起るのである。」罪と無情のみが心に光を滅しまたは暗くする力をもつてゐる。「たましひが冷たくなりそして次第に恩寵に背きゆくときは、」フランシスは云つた、「そのとき必らず肉と血は己れに屬するものを求める。」[9]

たゞにありとある罪を避けるのみならず、いかなる小さきものにもせよあらゆる過ちを離れること、これが神の歡喜に生くる要件であつた。目のなかに入つた砂埃はいかに小さくとも人をして光を見ざらしめることができる。フランシスはこれらのやうな小さい塵を防ぐことを弟子たちに敎へた、彼は殊に彼らが心をゆるして女性に近づくことを警しめた。異性の人と話してゐるとき彼はつねに地を見てゐるかあるひは高い空を見てゐた、そしてその話があまり永くなると思つたときには唐突にそれをやめた。ベヴニヤに於て彼と一人の兄弟は二人の母子なる信心の深い女にもてなされた、そしてフランシスはそれに對して彼らのために若干の訓へとなる言葉を語つた。「何故あなたは、あなたの脣から出るお言葉のすべてに身を委ねてゐる信心深い娘を一目も御覽にならないのですか？」兄弟はそこを出てからフランシスに尋ねた。「キリストの花嫁を見ることを畏れずにゐられやうか？」フランシスは答へた。敬虔な女性はみなフランシスの目にはキリストの許嫁であつた、そして彼はキリストの卑しき僕として彼らに目を向けることを敢てしなかつた。

この完全な捨離の報いとしてフランシスはまた完全な歡喜を享けた。時として刻として彼のたましひのうちに歌のごとく高まり、そして彼はつひには彼が胸のうちに聽く歌のメロディをかすかに口に誦して、むかし彼がフラテ・エシディオとゝもに福音を傳へに旅立つたときにしたやうにフランス語で口すさんだ。あ

きらかに、ます〳〵あきらかにメロディは彼の耳に聞える、そして力づよく、ます〳〵力づよくそれは彼のなかに高まつてくる――やがて彼は二つの木片または二本の枝を拾つて一つをヰオリンであるかのやうに頬に當てゝ、一つをヰオリンの弓のやうにその上に斜めに横へた、ます〳〵聲を高めて彼は歌ふ、そしてます〳〵熱心に彼はみづからのほかにたれも聞くことのできないメロディを模す彈奏をつゞけ、そのあひだに彼は拍子に合せて身體を搖りうごかす。つひに彼の感情は彼を壓し、そしてヰオリンも弓もうち捨てゝ彼は涌きたつ涙を流し、そして恰かも大いなる波に沈むごとくに彼自らのたましひの中に沈むのであつた。[10]

1. 「小さき花」六、二八、二九。
2. 「完全の鏡」八五。
3. Celano, Vita secunda, II, c. 2. c.
4. 「完全の鏡」四六――四八。
5. 「小さな花」三。
6. Boehmer, Analekten S. 65. „Laudes de virtutibus."
7. 「完全の鏡」一一六、一一七。九四。
8. Celbno, vita secunda II. 67,
9. 「完全の鏡」九三――九六
10. この「完全の鏡」の九三に書かれた物語はそれみづから一つの音樂のテーマである、私たちはこゝにまだ音樂とならない「音樂的なもの」を感ずる、私はかつて聞いたリストの symphonische Dichtungen の一つで聖フランシスを題したものを思ひだす。（譯者）

（この章にはチェラノのトマソの「第二傳記」から多くの材料がとられてゐる。）

四　ラ・ヱルナと烙印

一二二四年の夏のあひだにフランシスの健康は恢復したらしく、その八月に彼はリエティの谷を去つたこの旅の終局はカゼンチノの谷なるラ・ヱルナの山、オルランド・デイ・カッタニが一二一三年に彼に贈つた山であつた。彼は忠實な兄弟たち――レオネ、アンジエロ、マッセオ、シルヱストロ、イルミナート――とともにマリアの昇天（八月十五日）を祝ひ、そしてそのゝち四十日の斷食をもつて聖ミカエルの祭り日（九月二十九日）のために準備する願ひであつた。中世時代の他の人々と同じやうにフランシスはこの天使の長に對して特別な敬虔を――signifer sanctus Michaelis 天國の軍の旗手、そして彼の喇叭をもつて最後の日に死せる人々を墓のなかから呼びさます天使、されば昔の北方の民謠の言葉で Drammkvaede- Ljael Mikal と呼ばれたこの大天使に――抱いてゐた。

アルヱルナの山を贈物として受けたのち直ちに、フランシスは二人の兄弟をそこへ遣つて受け取らせた、オルランド伯爵の家人の助力をもつて兄弟らは絶壁の上に高い平坦の地面に所を定めて、枝を編んで泥を

塗つた二三の小屋をフランシスの心に適ふやうに造つた、そののちにオルランド伯爵は小さな會堂を建てた、それはボルチウンクラの禮拜堂と同じ名、卽ちサンタ・マリア・デリ・アンジェリ、「天使たちの聖マリア」といふ名をつけた。

ラ・ヱルナに至る旅のあひだにフランシスは再び氣力を喪つて、そして兄弟らは師のために一頭の驢馬を借りるためにある農家へ入へて行つた。何人がその獸を使用するのかを聞きつけた農夫は自から出てきた「あなたがその噂の高いフランチエスコ様ですが？」彼は訊ねた、そして肯定の答へを聞いて彼はなほ言葉を加へた、「それでは心がけて實際にも人のいふやうな善い行ひをして下さい、あなたを頼みにしてゐる人が澤山ゐるのですから。」心の底まで動かされてフランシスは身を倒して農夫の訓戒に感謝するためにその足に接吻した。これは自からフランシスと兄弟らとラ・ヱルナに案内しやうと申し出た農夫と同じ人ではなからうか？　それは誰であつても、彼は燃えるやうな夏の暑さのなかで、コルサロネの川から修道院までの長い、困難な登山のあひだにはげしい渴きにとらへられた。彼がこのことをフランシスに訴へたとき、これは直ちに彼とゝもに跪づいて祈りし、そしてすぐあとで農夫を泉のあるところへ導びくことができた『けれど今フランシスと兄弟らが山を攀ぢて、そして彼らがしばしとある槲の木かげで休息してゐたとき』——「小さき花」はかう語る——『そこには直ちに一群れの空の鳥が集まつて、たのしい歌をうたひ羽をたゝいて彼らを歡こび迎へた。そしてあるひはフランシスの頭に止まり、あるひは肩に、あるひはまた手や膝にとまつた。この奇蹟を見たときフランシスは曰つた。「したしい兄弟らよ、私たちがこの寂しい山の上に棲家を定めるのは疑ひもなく主イエス・キリストの御旨に適つたことである、されば」こそ私たちの姉妹、鳥はこのやうに私たちが來たことを歡んでゐるのである。」

『オルランド伯爵が、フラテ・フランチエスコと彼の伴侶たちがアルヱルニヤ（譯者の註、ラ・ヱルナに同じ）の山にきて住むと聞いたとき、彼は大いに悅んだ、しかして彼はあくる日あまたの城中の人々を伴つてかしこに行き、そして彼らは聖フランシスを訪れにきて、そしてパンおよび葡萄酒その他のものを多く携へてフランシスと兄弟らに贈つた。そして彼がその處の傍らまで行つたとき彼は彼らが祈りをしてゐるのに逢つた、そして近づいて行つた挨拶した。そのとき聖フランシスは起つて、オルランドの君を大いなる愛と歡こびをもつて迎へ、そして彼らは座について共に話つた。そして彼らが語り終り、そしてフランシスがオルランド伯爵に贈られたる靜けき山について感謝したとき、彼はオルランドの君に、一つの小さき貧しげな庵を、兄弟らの小屋から石を投げてとゞくばかりのところに離れた一本の美しい山毛欅の木のしたに建てさせるやうに乞うた、それはそのところはことに祈りに適してゐるやうに思はれたからであつた。そしてオルランドの君はたゞちに庵を建てさせ、そしてこれが終り、そして夕がたがきたときに聖フランシスは彼らに一つの小さい說教をした、そして說教を終へ、そして彼らに彼の祝福をあたへた。オルランド伯爵は家にかへらうとするまへにフランシスと兄弟たちを側らに招いて彼らに謂つた。「私の最もしたしい兄弟たちよ、私はあ

なたがたがこの荒れた山の上で窮乏に苦しむやうなことをさせたくありません、それゆゑ私はくれぐれもあなたがたに申します、もしあなたがたが何か乏しいときにはすぐに私のところへ使をよこして請求して下さい、もしあなたがたがさうならなければ私は決して善く思ひません。」そしてこれを云つたのち彼は從士とゝもに城へ歸つて行つた。

『フランシスはそのゝち兄弟らをすわらしめて、いかにして彼らが生活すべきかを定めた。そして彼は殊に彼らの心のうちに聖とき貧しさを守ることを刻み、そして彼らに謂つた。「汝たちが我らの貴女、貴とき貧しさに對して誓つた忠實を破らないやうに、汝たちはオルランドの君の親切な言葉をあまりに賴みにしてはならない。」そしてあまたの美しい敬虔な言葉をこのことについて謂つたのち、彼はかう云つて結んだ、「これこそ私が汝たちと私自らに負はせる生活の方法である。そして私の死の近づくのが目に見えるゆゑに私はたゞひとり離れて神のまへに留まりそして私の罪を哭きたいと思ふ。そしてフラテ・レオネは私のところへ時々少し許りのパンと水とをよきほどに持ちきたれ、そしてもし何人が來たときには私のために代つて應對し、そして私のところへ何人をも來させてはならない。」彼はこれらの言葉を云つたのち彼らに祝福を與へて、そして山毛欅の木のしたにある己が小屋に赴いた、そして兄弟らは彼らの小屋に殘つてゐた。

ラ・ヴルナでは今も聖フランシスの足をとゞめた處々が見られる——サツソあるひはマツソスピツコ彼がその下で祈るのを常とした大きな覆ひかぶさつてゐる石、突き出た石の棚を硬い臥床とした暗い濕つぽい洞、フラテ・レオネの窟は山腹に高く位置を占めてゐる、そこではフランシスが幾多の朝な朝な味爽に起きて彼の友が讀誦するミサを聽き、われらの主の肉と血が白いオスチアと黃金の杯のなかに假の姿として、フラテ・レオネの高くさしあげた手にこの涙の谷にさまよふあはれな順禮の唯一つの慰安として光りかがやくのを禮拜したのである。

何となれば、こゝにまたフランシスは行く末を思つては安からぬ思ひをもち、憂ひにみち、そして首を低れた。いかにそれはなりゆくべきであらう？　人々は彼の伴侶たち彼の子どもらを彼から引き離してしまつた、そしていまいづこへと彼らを導いてゆくのであらう？　彼らはフランシスが彼らを遺りたくなかつたところへ行つた、そして彼は力なくそれを傍觀してゐなければならなかつた……

フランシスが、完全な小さき兄弟、完全なプロヰンチアのミニストロ、團體のジエネラレがかくあるべき理想の肖像畫を描いたのも徒らごとであつた——彼は現實がこれとまつたく異つてゐることを知つてゐた。フラテ・エリアやその一味のものは、フランシスの欲したやうな「一冊の書、一個の墨汁壺、一個のペンと一個の印」をもつては滿足しなかつた——彼らは書籍を蒐集し、寺院法律を學んだ、そして彼らに法律の文字によらずして福音の精神によつて兄弟らに對して行へと敎へるのは徒らに勞力の浪費であつた。二たび三たびフランシスは神に歎息しなければならなかつた。「主よ、私はあなたが私に與へて下さつた家族をまたあなたにお任せいたします——私は彼らをもはや自ら導びくことはできませぬ。」けれどなほ去り

がたく美しい夢は心に歸つてきた、そしてむかしの日にあつたやうに彼と最愛の子どもらとのあひだには何も距てるものなく、そして彼らは諧和のなかに一つの心となつて、もはや再び離れぬものとなつてゐるかのやうに。

ある日フランシスはかやうな彼のたえまなき夢みからめさめ、そしてまた新しく現實を意識したとき彼は彼がまへにしばしば用ゐた方法にたよつて未來を覆ふ覆衣の一端を開かうとした。彼はフラテ・レオネに乞うて福音の書を取らしめて、そして聖とき三位一體の榮えのために、それを三たび開くことを命じた。レオネは師の求むるごとく行つた、そして三たびともにみなキリストの受難のところを開いた。そのときフランシスは彼のためには最後まで惱むほかはなく、そして彼の幸福は呼びかへしがたく去つたことを理解した。そして彼は神の意志に己れをゆだねた。

その夜彼は眠ることができなかつた。徒らに彼は彼の硬い臥床の上に寢返りした——徒らに彼はラ・ヱルナの鷹たちがその叫びをもつて、起きてマットゥチノを唱へる時を告げ知らすのを待つてゐた。「天に於いては何ごともたゞそれがあるべきごとくにあるであらう、」フランシスは自ら慰さめた、「かしこに、少くもかしこに平和と幸福が永しへにある！」そしてこの思ひとともに彼は眠りに落ちた。

そのとき彼には一人の天使がギオリンと弓とを手に携へて彼の床のかたはらに現はれるやうに思はれた「フランチェスコよ、」輝やく天つ國の民は謂つた、「私は汝のために天なる神の御座のまへで奏でるごとくに奏でやう。」そして天使はギオリンを頰にあてゝ弓を絃の上にたゞ一度だけ引いた。そのときフラテ・フランチェスコはかばかり大いなる歡こびに滿され、そして彼のたましひは一つのいひがたくなつかしき甘美の味ひにみたされて、彼はもはや身體をもたぬかのごとく、そして隱された悲痛の一つをも知らないかのやうであつた。「そしてもし天使が弓を絃の上になほ一たび引いたならば、」とかやうにフランシスは兄弟らにあくる朝話した——「私のたましひは抑へがたき幸福のためにこの身を離れなければならなかつたであらう。」

マリアの昇天の祭りのゝちフランシスは兄弟らのもとを去つてなほ一層距たれる寂寥のなかに退いた。彼が自らのために擇んだ場所は深い岩の谷の向ひ側にあつて、それを越すには倒れた木の幹が深淵を渡る橋として用ゐられた。こゝでフランシスは一つの小屋のなかに籠つた、そしてフラテ・レオネと約束を定めて彼は二十四時間中に二度彼を音づれるべきことにした、一どは晝のうちにパンと水をもつてくるため、一どは夜なかにマットゥチノのために。レオネは橋を渡りかけるまへに彼は祈禱書のなかの歌唱の始めの言葉——讃歌のことば「おゝ主よわが脣を開きたまへ、」Domine, labia mea aperies. と言ふべくそしてフランシスがかなたからそれ對應する答へ、「しかしてわが口はきみが讃へを宣べなむ」Et os meum annuntiabit laudem tuam. をしたならば、そのときレオネは橋を渡つてフランシスとゝもにマットゥチノを唱へるのである。けれどもし答へを聞かないときには、彼は靜かに歸らなければならない。「けれどこのことをフ

ランシスが曰つたのは、彼はしば〳〵終日口に物言ふことのできないほどの法悦の狀態にあることがあつたからである、彼はそれほどにも神に心をうばはれてゐた、」と「小さき花」は謂ふ。

しばらくフラテ・レオネは師の命令を誤りなく行つた。しかしながらやがてある夜彼がつねのごとく橋のところに立つて常の言葉を云つた、けれどフランシスは答へなかつた。

さてそれは月の夜のことであつた——アペンニの山地の九月の夜に屢ばあるやうに秋の冷氣にすみわたつてゐた。ひろく地はすみわたつて無言にそして寂しく眠つてゐた、そして山毛欅の木の枝のあひだに深くてらす月の光は雪のやうであつた。月は人なき小屋にさし入つた、そしてしばし躊躇したのちにレオネは橋を渡つた。

彼は密そかに木々のあひだを忍んで行つた——いづこにもフランシスの痕もなかつた。つひに彼は祈る人のあるかと思はれるつぶやきを聽きつけた、そして物音をたどつて彼はフランシスを見つけた。兩腕を十字架の形のやうに伸して、顏を天に向けて、彼は地に横はつて聲高く祈つてゐた。レオネは立ちとまつた身うごきもせずにじつとして木のかげに立つた、そして今彼は師の祈りの言葉を聞くことができた。清みわたつた、殆ど霜も結びさうな夜の空氣にそれは一つ一つ彼につたはつた。

「おゝわが最もなつかしき主よ、神よ、」フランシスは天を仰いで叫んだ、「あなたは何でいらせられますかそしてまことに私は何であらうか、あなたの小さい、益なき蟲なる僕の身は？」

これを彼は二度ならずくりかへして曰つた、フラテ・レオネが足を動かして思ひかけず木の枝を踏んで音がしたときまでは。この音でフランシスはすぐに祈りをやめて立ち上つた。「イエスの御名に於て、」彼は呼んだ、「止まれ、何人なりとも、その處から動くな！」彼はレオネに歩みよつた。

フラテ・レオネは後に他の伴侶らに語つた、この瞬間に於て彼はもし大地が足もとに裂けたならば、直ちにそのなかに身を隱したかつたほど怖ろしさに立ちすくんだ。何となれば彼はフランシスが彼の從順ならざることの罰としてもはや彼の側に彼を置かないだらうと思つたのであつた。そして彼のフランシスに對する愛は、彼が彼とゝもにでなければ生きてゐることができないと思はれるほど大いなるものであつた。

けれどフランシスは木の下に近よつてきて曰つた、「汝は何人か？」全身を慄はせながらフラテ・レオネは答へた「私であります——レオネ。」けれどフランシスは彼に曰つた、「神の小さい小羊よ、何故汝はこゝへ來たのか？　私の樣子を窺つてはならないと汝に曰つたではないか！　聖とい從順の名に於て、もし汝か何か見とめたならば隱さず語つてくれ！」彼は答へた。

「父よ、我はあなたが語り、話しそして祈り、敬虔にみちた聲でかう仰しやるのを聞きました、わがなつかしき主よ神よ、あなたは何でいらせられますか、そしてまことに私、あなたの小さい益なき蟲なる僕の身は何であらうか？」そしてフラテ・レオネは跪づいて身を倒して大なる畏敬をもつて曰つた、「父よ、私はお願ひいたします、どうぞ私の聞いたその言葉を私に說き明してください！」

露光量違いの為重複撮影

そしてフランシスはレオネをしげ〳〵と見た、そして彼の心はまめやかなる弟子の愛と從順について歡こびにみたされた。

「お、イエス・キリストの小さき小羊よ、私のまめやかな兄弟、レオネよ！　汝が聞いたその祈りのなかに二つの光は私に啓き示されたのである、一つの光のなかに我は創造の主を識り、一つの光のなかに私は私自らを識つた。私がわが主よ神よ、あなたは何でいらせられますか？　そして我は何であらうか？　と曰つたときそのとき私は觀照の光のなかに在つて、そのなかで私は神の善のかぎりなき深みと私のみじめな憐れさの悲しき深淵を見た。それ故私は曰つた、主よ、おんみもつとも高きもの、おんみ賢こきもの、おんみすべて善、すべて恵みなるおんみは何故なれば私に、あらゆるものゝうちに最も憐れむべき蟲、小さき、厭はしき、輕んずべき被造物におとづれて下さいます？　これらが卽ち汝が聞いた言葉であつた、小さき小羊よ！　けれど自ら守れ、そして私をもはや窺つてはいけない、神の祝福をもつて汝の小屋に歸つておいで！」

日々と夜々は過ぎた――まもなく聖とき十字架の建立の祭り（九月十四日）は近づいた、それは紀元六二九年にローマ皇帝ヘラクリウスが、十四年まへにペルシア王ホスローのエルザレムを陷れたときからその手にあつた眞の十字架を回復したことを記念する祭りであつた。

十字架と十字架の像とは聖フランシスにとつては最も深き宗教的感情の對象であつた。

アルブレヒト デューレル作

聖フランシスの烙印の奇蹟

露光量違いの為重複撮影

そしてフランシスはレオネをしげ〳〵と見た、そして彼の心はまめやかなる弟子の愛と從順について歡こびにみたされた。

「お、イエス・キリストの小さき小羊よ、私のまめやかな兄弟、レオネよ！　汝が聞いたその祈りのなかに二つの光は私に啓き示されたのである、一つの光のなかに我は創造の主を識り、一つの光のなかに私は私自らを識つた。私がわが主よ神よ、あなたは何でいらせられますか？　そして我は何であらうか？　と曰つたときそのとき私は觀照の光のなかに在つて、そのなかで私は神の善のかぎりなき深みと私のみじめな憐れさの悲しき深淵を見た。それ故私は曰つた、主よ、おんみもつとも高きもの、おんみ賢こきもの、おんみすべて善、すべて惠みなるおんみは何故なれば私に、あらゆるものゝうちに最も憐れむべき蟲、小さき、厭はしき、輕んずべき被造物におとづれて下さいます？　これらが卽ち汝が聞いた言葉であつた、小さき小羊よ！　けれど自ら守れ、そして私をもはや窺つてはいけない、神の祝福をもつて汝の小屋に歸つておいで！」

日々と夜々は過ぎた――まもなく聖とき十字架の建立の祭り（九月十四日）は近づいた、それは紀元六二九年にローマ皇帝ヘラクリウスが、十四年まへにペルシア王ホスローのエルザレムを陷れたときからその手にあつた眞の十字架を回復したことを記念する祭りであつた。

十字架と十字架の像とは聖フランシスにとつては最も深き宗教的感情の對象であつた。

アルブレヒト デューレル作

聖フランシスの烙印の奇蹟

サン・ダミアノのさびしい堂で一二〇七年に彼を浮世から悔い改めて赤裸々の貧しさに於てキリストのあとを逐はしめたのは十字架の聲であつた。「その時より、」三人の兄弟の物語（Tres socii）は曰ふ、「彼の心はキリストの受難の追憶に痛み傷つき、世を終るまで彼は心のうちに主イエスの傷を留めたり。」

彼がまだ若かつたときボルチウンクラのかたはらの森のなかで歩みつゝ泣いたのは彼の目のまへに十字架にかゝれる人の苦しみが顯はれたからであつた。ある日そこで彼に逢つた一人の人は彼の悲しみの故を問うた。フランシスは答へた、「私は主イエス・キリストの苦痛のために泣きます！」そして彼の悲しみはつひにその知らぬ人さへも泣きはじめたほど大きい純粹なものであつた。

十字架を讃へることがフランシスの兄弟らに教へた祈りの目的であつた、「我らはおんみに祈る、おゝ主よ、しかして讃へまつる、おんみは聖とき十字架をもて世を救ひたまひたればなり。」そして彼は兄弟らが二つの藁あるひは二つの枯枝が十字のやうに重なつてゐる上を踏むことを許さなかつた。

そして他の兄弟たちもまた十字架の象徴に於いて彼を理解した。シルヱストロは黄金の十字架がフランシスの口から出て全世界の上に立つと夢みた、そしてフラテ・パチフィコはある夜の夢に彼が一つの十字架のやうに二つの劍に貫かれてゐるのを見た。即ち一つの劍は頭から足まで達し、一つは胸と兩手を貫いてゐた。レオネは一たび大いなる金色の十字架がフランシスのまへに立つて行くのを見た。

聖十字架の建立の祭りのミサのなかには、あたかもすべて十字架に關する聖書と寺院の言葉が誦文のな

かに集められたごとくである。「この十字架の印は主審判にきたり給ふとき空に立つべし。」あるひは聖パウロの言葉で、「われらは主イエス・キリストの十字架に於て榮えむ、そのなかにわれらの救はれ、生命、復活あり。」またはつぎのごとき、「キリスト、ペテロを海に救ひたまひし救ひ主よ、我らを救ひたまへ、おんみの十字架の力によりて我らを憐れみたまへ。」「いましうれしき十字架よ、いまし貴とき十字架よ、木々のうちにもいと貴く、この木に比ふべきものはいづこの森にも生ひ出でず、よき葉と花のこの十字の木、」昔の讃美歌の言葉はいふ。そして再び十字架について、十字架にさゝげて、「汝はレバノンの香柏よりも美し汝はパラデイゾの園の眞中に立つ生命の木なり。」「主の十字架を見よ、その敵なるものはみな遁れよ！　ユダの裔なる獅子は勝ちぬ、アレルヤ！」

すべてこれらの強い言葉に心をつらぬかれて、フランシスは九月十四日の朝彼の小屋の外に祈りに伏してゐた。まだ夜はあけなかつた、けれど日の出を待ちながら彼は祈つた、顏を東にむけて、手をあげて腕をのばして、

「おゝ主よイエス・キリストよ、私の死ぬるまへに二つの恩寵の賜物をあなたに乞ひます。第一には私の能ふかぎり私のたましひと肉體のなかにかの苦しみを、おゝやさしきイエスよ、あなたの痛ましき苦難に於て受けられた惱みを感ずることを許して下さい。第二のめぐみは卽ち、神の御子よ、あなたが私たち罪人らのためにこれほどまで多くを堪へ忍びたまふまであなたを促し、そして燃やしたその強き愛を私の心にも能ふかぎり感ずることを許して下さい。」

『そして彼が永いあひだかやうに祈つてゐたとき』むかしの話は物語る、『彼は神がこの二つのことについて彼の祈りを聽かれたことを確かに感じた、そして彼にこの二つのものが一個の被創造物の身として能ふかぎりを受くべく與へらるべきことを。しかして彼がこの誓約を受けたときのゝち彼は大いなる敬虔をもつてキリストの苦しみとキリストの限りなき愛を靜思しはじめた、そして信の熱さは彼のなかにますます強く高まり、愛と同情をもつて彼はつひにイエスの姿に變へられた。

『しかして彼がこの祈りに伏してこの焰に燃えてゐたとき、見よ、彼はその朝の時刻に一人のセラフィムが六つの輝やく翼をもつて天から降つてくるのを見た。そしてセラフはすみやかに聖フランシスの側らに來た、よつて彼はセラフが十字架にかゝれる人の姿を備へ、その翼の二つは頭上に擧げられ、二つは飛ぶために伸ばされ、二つは全身を蔽うてゐるのを見定めることができた。

『けれど聖フランシスがこの顯現を見たとき彼ははなはだ恐れた、そして同時に彼は歡こびと悲しみと驚きに滿たされてゐた。何となれば彼はやさしきイエスが彼のまへにそのやうに親しげに姿を現はして彼を愛するやうに見守つたことを歡んだ、けれど主が十字架に磔けられてゐるのを見たときにそれは言葉につきせぬ悲しみを感じさせた。そしてその上に彼はかゝる常ならぬ駭くべき顯現をあやしんだ、何となれば、彼は人としての苦しみはセラフの死なざるたましひと一になりがたいことを知つてゐたからである。けれ

ど彼がかやうにあやしんでゐたとき、彼のまへに立つたものによつて、前の顯現は神の特別な御心によつて備へられて彼に許されたものであること、彼は肉體の殉難に依らずして、たゞ內心の火の焰によつて彼がまつたく十字架にかゝれるキリスト・イエスとおなじ姿に變へらるべきことをさとつた。

『けれどこのふしぎなる顯現のつひに消えうせたのち、聖フランシスの心には一つの溢るるばかり強き光熱と神の生ける愛とが殘つてゐだ、そして彼の肉體のうへに顯現はキリストの受難のふしぎなる像と印（スティムマタ）とを殘した。直ち彼の手と足にあたかも釘のごとき印は現はれはじめた、そして手足は恰かも眞中を穿たれたごとく、釘の頭は兩手の掌のなかと足の甲にあり、そしてその尖は手の甲と足の裏にあつた、そしてそれらは曲つてゐて、そのために肉と釘の尖とのあひだには指を入れるほどの隙があつて恰かも指環のごとく、そして釘は黑い丸い頭がついてゐた、そして同樣にして彼の右の胸わきには槍の突傷の像が現はれ、傷口はないけれど赤く出血して、そこから血は屢ば聖フランシスの胸から流れて衣や下衣を浸した。

『けれどフランシスはこれらについて兄弟に何も語らなかつた。そして彼は手を隱し、足の裏をばもはや地につけることはできなかつた。そして兄弟らは洗濯をするとき彼の衣服が血に染んでゐるのを見出だしそしてそのとき彼らはフランシスが主イエス・十字架のキリストの姿と類似を胸わきと手足とに受けてゐることを了解した。』

この章については「小さき花」なる「烙印についての考察」による、私にはそれは大部分レオネ、マッセオ、アンジェロらが書きもので、または口授でつたへたものに據つたと考へられるからである。

五　兄弟たちへの告別

フランシスは彼の身に起つた奇蹟をあまり永いあひだ隱して置くことはできなかつた。第一に彼はインスパイアされた、眞心の篤い友だちの中心にあり、そして彼らの心はつねに彼のことのみ思つてゐた。そして一方には彼の受けた傷は彼に大いなる苦しみとなり彼の存在をまつたく困難にし、そして彼はよぎなくも他の人々の扶けを借りなければならなくなつた。恐らくレオネは彼が祕密を明した第一の人であつたらう。フランシスは手足を動かすことのできるために突出てゐる釘のまはりに繃帶を卷かなければならなかつた、レオネは毎日この繃帶を代へた、けれど木曜の午後から土曜の朝まではそのまゝにするのであつたといふ何となれば、フランシスは主とゝもに苦しむことを欲したからである。フラテ・ルフィノもまた師のために洗濯をするときに、着物の胸の右が脇にある傷から出た血に浸つてゐるのを見てその神祕のすべてを覺つた。後に彼は一計を案じて目のあたりその傷に觸れ、目に看ることができたといふ。

彼が烙印を受けたのちのフランシスのたましひの狀態については一つの觀念をつくることは困難である今よりは彼は普通の人間的なものを高く超越したものであつて、我々は——師が屢ば木の梢とひとしい高

さにまで空に浮んでゆくのを見たといふレオネのやうに――地にひれ伏して、その祝福されたる人の足に
踏まれた土に接吻し、そしてまめやかな弟子とゝもに「神よわれ罪人にいつくしみをあたへ、われをして
この聖とき人の仲介によりておんみの憐れみと受け得させたまへ、」と叫ぶほかのことはできない。

烙印を受けたことの第一の結果は大いなる歡こびでありあらゆる憂ひや悲しみからの全たき解放であつた。再び達したる心のうちの幸福の感情はそれであつた、それは彼が聖痕をうけたのち直ちに「彼に與へられた恩寵の感謝のために」書いた讃美(ラウデ)の歌に自ら聲を與へた。その全文はかくのごとくである――

『おんみは聖とし、主なる神よ、おんみは神々のうへに神なり、たゞひとり奇しき御業を爲したまふ。おんみは強し、おんみは大いなり、おんみはもつとも高し。おんみは能はざることなし、おんみは聖とき父天と地の王なり。おんみは一體に於て三位なり、たゞ一人の主、神々のうへに神なり。おんみは善なり、すべて善なり、最も大いなる善なり、主なり、生けるまことの神なり。おんみは愛なり、おんみは智惠なり、おんみは謙だりなり、おんみは忍耐なり。おんみは美しさなり、おんみは安靜なり、おんみは平和なり、おんみは歡こびなり。おんみはわれらの希望なり、おんみは正義なり、しかして節制なり……おんみはわれらのあらゆる富なり、おんみは溫順なり、おんみはわれらの保護者なり、おんみはわれらの衛士なりわれらの防ぎなり、おんみはわれらののがれどころ、われらの力なり。おんみはわれらの信なり、われらの希望なり、われらの愛なり。おんみはわれらの大いなる甘美の味ひなり、おんみはかぎりなき善、大

いなる讃ふべき主全能の神、やさしきあはれみふかき救ひ主なり。」

フランシスが自らをキリスト教の歡喜の最高の巔に上せられたと感じ、そしてネボのうへなるモゼスのやうにすでに約束せられたる國をはるかに望み見たとき、彼のもつともよき友は大いなる誘惑の餌となつてゐた――肉體のそれではなく、靈的な種類のものであつたと、古い典據は語るけれどそれ以上の精確な說明がない。あるひはレオネは師に對して羨やみの感情に誘はれたのであつたらうか？　レオネはあるひは友であり兄弟であるフランシスが彼の從ひゆくことを許されぬ境地に深く入つてゆくのを見て嫉みを感じ安からず思つたのではなからうか？　いづれにしても彼は彼が忘れられたのではないことの證しを、フランシスの身に起つた大いなることにもかゝはらずむかしの仲らひはいまゝでとおなじく强固なものであることの保證を求めたごとく見える。レオネはフランシスがあのやうに友愛に滿ちた仕方で彼に書きあたへたときのことを思つた、そして親しい見なれた手蹟が一つの手紙に於いていかに意義のあるものであるかを知つてゐる人ならば、たれしもフラテ・レオネが何ものかをフランシスの手から受けたいと思つた熱望を理解するであらう。彼らは毎日見ることができた、けれど彼らのあひだにむかしの友情がもはや存在しないかのごとく思はれるとき、そのことは何のかひがあらう？

彼の常のごとく纖細(デリケート)な感情でフランシスは彼のしたしき友のたましひを惱ましてゐるものを看て取つたやうに思はれる。それ故ある日彼はレオネを招いた、そして羊皮とペンと墨汁とをもつてくることを乞う

た。レオネが心に待ちながら側に立つてゐたとき、フランシスはまづ上に曰つた讃美の歌を記し、そして裏返してその上に大きな字で舊約全書のなかにある族長の祝福を書いた、

"Benedicat tibi Dominus et custodiat te ostendat faciem suam tibi et misereatur tui, convertat vultum suum ad te et det sibi pacem."

「主汝を惠み汝を守りたまへ、その面もて汝を照し汝を憐れみたまへ、主顏せをあげて汝をかへりみ汝に平和を賜へ。」

しばしフランシスは筆をとめた、やがて彼はなほ筆を加へた、"Dominus benedicat Leo te.,"「主祝福したまへ、レオネよ、汝を。」そして彼の名を記すかはりに彼は全體の下に、舊約全書にある十字架の象徴Tの字を書いた、それはゴルゴダの髑髏の上に建てられて、キリストによつて征服された死の意味をあらはすのであつた。

目ざしにも微笑みにも心の善さを湛へてフランシスは羊皮の書きものをフラテレオネに手渡した。「これを取れ、」彼は曰つた、「そして汝の死ぬまで携へよ。」そのときすべてレオネの心のうちのくらさ憂ひは彼を去り、そして目に涙をうかべて、彼は師が彼に與へた壞りがたき友愛の保證を握つた。彼が老いたのち—レオネは一二七一年に死んだ——までも彼は己のが心のつぎにこのラ・ヱルナよりの羊皮を抱きしめ、そして彼の死んだのちそれは遺産としてアッシジのフランチェスコ寺に渡り、そこで今日まで聖物庫に納められてゐる。

九月三十日にフランシスはレオネとともにアルヱルニアの山を去つた。オルランド伯爵は一頭の驢馬を贈つた、足を用ゐることのできない烙印をうけた人は、これに騎つて旅することとなつた。フランシスは朝はやく兄弟たちとともに小さい禮拜堂でミサを聽聞し、そして彼らに最後の訓戒を與へた。そして彼は一人一人に別れを告げた——アンジエロ、マッセオ、シルヱストロ、イルミナトらに。「平和に棲め、最愛の子どもらよ、さらば、さようなら！　私の肉體は汝らから離れてゆく、けれど私の心は汝らの許に殘されてゐる！　私は神の小羊なる兄弟とともにボルチウンクラに往く、そして私はもはやここに歸らない！　さようなら、さようなら、さようなら、みなのものよ！　聖とい山よ、さようなら！　さようなら、アルヱルニアの山よ、さようなら、天使の山よ、さようなら、汝の鳴き聲で私を呼びさましてくれた兄弟、鷹よ、おまへの心づかひに感謝する！　さようなら、その下で私が祈りをした大きな石よ、汝を私は再び見にくることはできないであらう。さようなら、サンタ・マリアの堂よ——おんみに、とこしへの道の母君に、私はこれら私の子どもらをゆだねます！」兄弟らがあとに殘されて禁めかねた歎きに沈んだとき、フランシスはかやうな大いなることが彼の身に起つたこの山から、これを最後に立ち去つて行つた。[1]

フランシスはボルゴ・サン・セポルクロの方へ行つた。そして彼が近くのキウジの町でオルランド伯爵に別れをつげたのち彼はラジナの河を渡り、フラテ・レオネとともにモンテ・アルコッペ、モンテ・フォレスト、そ

してモンテ・カゼルラを越える道をとつた。彼はモンテ・カゼルラの巔に歩みをとめた、そこからラ・ヱルナの最後の眺望をすることができる、そして彼は馬をとめ、鞍から下りて跪づいた。はるかなるラ・ヱルナ、秋の重い雲の下に遠くその尾根を聳やかす峯へと目を擧げて、彼は十字架の印をその方へつくり、そして最後の告別、最後の感謝、最後の祝福をした。

「さよなら、汝神の山よ、汝聖とき山よ、岩ねこごしき山よ、ゆたけき山よ、そのなかに神の愛でたまふ棲家ある山よ。Mons coagulatus, mons pinguis, mons in quo bene placitum est Deo habitare! さよなら、モンテ・アルヱルニア——父なる神、子なる神、聖靈なる神は汝を祝福したまふ！　安らかなれ、けれど私はもはや汝を見ないであらう。」

フラスシスはそのあとで彼の靜かな驢馬に跨つてモンテ・カゼルラを下つた。そして彼は旅の殘部のあひだあまりに思ひに沈んでゐたので、ボルゴ・サン・セポルクロを過ぎるとき彼はそれを知らなかつた、そして町がすでに彼らのうしろになつたとき、彼は瞑想よりさめて、ボルゴに近づいたかと問うた、

そのうへ旅は凱旋の行列となつた。民衆は到るところに橄欖の板を振つて「聖者を見よ、Ecco il santo!」と呼んでフランシスを迎へた。彼は手をさしのべて接吻せしめなければならなかつた、そして彼によつてあまたの奇蹟が行はれた、産の苦痛に横はり生命の危險に迫つてゐた一人の女は聖フランシスの驢馬の、彼の手をもつて觸れた手綱を彼女の上に置いたばかりで癒された。チツタ・ディ・カステルロではフランシスは一月滯留した、そしてそこで彼は他のことのうちにもたゞ一ことを命令したばかりで狂亂に達したほどのヒステリーの一人の女を癒した、つひに彼はボルチウンクラへ赴いた。それは一二二四年の十一月であつた、そしてアペンニニの山の雪はすでに深く積つた。そしてあるときフランシスとフラテ・レオネと、彼らに驢馬を貸した農夫とはある夕方つひに人の住家を見つけることができなくて山のなかで一夜を明さなければならなくなつた。雪は降りしきるのに彼らはたゞ一つの岩かげに庇まはれてゐるばかりであつた。二人の兄弟たちにはこれはあまり忍びがたいことでなかつた、けれど農夫は詛つたり怒つたりした——こんなことになるのも彼があまり馬鹿親切だつたからだ、家にじつとしてゐれば今頃は氣もちのいゝ寢床に横になる時刻なのに、といふやうなことを思つてゐた。フランシスはつひに怒れる男をなだめることができた、そして朝になつたとき農夫は自らまつたく滿足してゐることを告げ、ここに家の外で岩のあひだに雪に降られて眠つたときほどよく眠つたことはなかつたと語つた。

フランシスはボルチウンクラに歸るや否や直ちに傳道の旅に上つた。それは恰かも青春の熱心がすべて再び歸つてきたやうに思はれた、彼はまた新しく大いなる事を爲すのぞみを語つた、しばしのあひだ彼にはすべてを再び始めからやりなほすこともまだ遲からぬやうに思はれた。「私は再び癩病者のもとに行きて彼らに仕へ、そしてあらゆる人々に侮られたるものとならう。」と彼は曰つた[2]。驢馬に騎つて彼は屢ば一日に四つあるひは五つの町々を訪れて說教し、そして癩病者を見出せば彼らに役はれた。「小さき花」にある話

はそのころに屬することあらう、それには、一人の癩癲もちの癩病患者があつて、彼の世話をした兄弟たちは手段をつくしても彼を慰さめることができなかつた、そして彼は彼らを言葉と毆打をもつて辱しめそのうへ神とあらゆる聖者たちを嘲けり罵つて、そして人々は彼のことばを聞くに堪へなくなつたといふ。『けれどフランシスは自からこの神を忘れた癩病人のところにきて彼に挨拶して曰つた、「神は汝に平和を與へたまふ、したしい兄弟よ。」けれど癩病人は答へた、「神様は私から何物も殘さず奪ひ去り私の全身を腐らせ臭くしたのにどんな平和を與へるのか？　そして私はたゞ病氣のために苦しめられるばかりでなく、けれど汝が遣した私に使はれ私をいたはるべき兄弟たちはなすべきとほりに私の世話をしてくれなかつたのだ。」

そのときフランシスは曰つた、「わが子よ、汝は他の人では氣に入らないならば私が汝の世話をしやうか？」「それはありがたい、」病者は答へた、「だが汝に何が他の人たちよりももつとよくできるか？」「私は汝の欲しいやうにしてあげやう、」と聖フランシスは答へた。そのとき癩病人は曰つた、「それでは汝は私の全身を洗つてくれ、この惡い臭ひに私は自分で堪らないのだから。」

聖フランシスはそこで湯を沸かさせあまたの香りよき藥草を浸した、そして彼は病者の衣を脱がせて、手づから彼を洗ひ、そして一人の兄弟は水を注いだ。そして神の奇蹟によつて、聖フランシスが祝福された手で觸つたところからは惡瘡は消えて、膚はまつたく健やかになつた。そして肉が癒されるとゝもにたましひもまた癒やされた。されば癩病者が己れの癒えゆくのを見たとき、彼は己れの罪について大いなる悔いと悲しみと堪へかねて、悲痛の涙をながしはじめた。そして彼がたましひにも肉にもまつたく癒されたとき、彼は謙だりに於て彼自らを罪し、そして涙ながらに聲高く叫んだ、「私は禍の身です、私は兄弟らになした不義と、そして私の怒りと神を瀆すことによつて、自から地獄に値する身となつてしまひました」

けれど聖フランシスはこのごとく大いなる奇蹟のために神に感謝し、そして遠いところへ立ち去つた、何となれば謙だりの心より彼はあらゆる譽れを恐れ、そしてすべてのことにたゞ神の譽れと榮えを求め決して彼自らのを求めなかつたからである。[3]』

1　こゝに引用したのはフラテ・マセオが書いたものとすべき "Addio di S Francesco alla Vernia" である、（全文は私の譯「小さき花」の卷尾に添へてある。）　2. Celano : Vita prima II. C. 46.

3. 「小さき花」二十五、なほ「完全の鏡」四四、五八に於いて聖フランシスと癩病者らとの關係はよく理解される。

六　自然美を愛する人フランシス

滅えなむとする燈火は最後にぱつと燃えあがる。そして聖フランシスの新しくめさめた熱心はかやうな最後のひらめきであつた。たましひはまことに意志をもつてゐた。けれど彼が驢馬に跨つてゐるところは生ける人といふよりはむしろ死せる人のすがたで、そしてしばらくフランシスとともにフオリニヨにゐた

フラテ・エリアには師が二三年より多く生きられないことは明らかであつた。エヂプトからもつてきた、そして彼がいまゝで治療したことのなかつた眼疾は、今は激しくなつて、エリアのみならず他の兄弟らも醫療の助けをもとめることを勸めた。

これはフランシスの考へと相應しなかつた。彼の「戒め」の一つのなかに彼自ら、病める兄弟らに對してあまり熱心に療養を努めてはならないこと、けれどあらゆることのために神に感謝しそして神が欲したまふより以上によきことを求めざることを忠告した、何となれば神はその愛したまふものを潔めたまふからである。醫師をもとめる代りに彼は再び孤獨を求め、そしてこんど彼が隱れたのはサン・ダミアノであつた。姉妹たちの修道院の近くに、聖キアラは一つの枝で編んだ小屋を建てさせ、フランシスはそのなかに棲むことができた。[1]

それは一二二五年の夏であつた、そして眩ますやうなイタリアの太陽はたしかに聖フランシスの眼疾に害をなしたであらう。しばらくのあひだ彼はまつたく盲目で、そして時々一群れの野鼠に襲はれた。それは思ふに小屋の藁壁に巣をつくつてゐたので、屢は彼の顏の上をさへ走つて、晝も夜も彼に安らかさを與へなかつた。このときほどフランシスがみじめで不幸であつたことはなからう。そしてけれどこのミゼラブルな病床に於いて、盲目の暗黑と野鼠の騷ぎの眞中にありながら、彼は彼の輝く傑作、"Canticum fratris solis"：われらが兄弟太陽についての晴れやかな歌を作つたのである。

「太陽の歌」を理解するために、我々は聖フランシスの自然に對する關係を理解しなければならない。彼を一人の汎神論者と名づけるほど不當なことはない――彼は決して自己あるひは神を自然と混同しなかつた、そして汎神論者に屢ばある惑溺的な狂歡と厭世的な憂鬱のあひだの情調の交替は彼にはまつたく知られなかつた。フランシスは決して、シエレーのごとく自からが宇宙と一つにならうと欲しなかつた、また彼はゲエテの「エルテル」あるひはまたツルゲニエフのごとくに事物の避けがたい盲目的な必然と、自然の「永しへに物思はしげなる怪物」の面前に自らを見棄てられたごとく感じて戰慄することをしない。自然に對する聖フランシスの立つところは全部、そして一つに信仰個條の第一に在る――彼は同時に創造者である一人の父を信じた。

そしてかくのごとき同一の父に對する共通な關係から彼はありとあらゆる生けるもの、然り、ありとあらゆる被創造物に於て純に兄弟と姉妹を見る。天の父の御國には多くの家がある、けれどたゞ一つの家族である。この思想はギリシヤ的でなく、ゲルマン的でなく、たゞそれは純粹にヘブライ的であつて、それ故純粹に基督教的なものである。アナニアとアザリアとミザエルがバビロンの暴君の火爐の燃ゆるなかに入れられつゝ歌つた讃歌はユダヤ教會からの贈り物であるかのやうに教會のものとなつたが、そのなかにはかくのごときものがある、

すべて主の御業なるものよ、主を讃へよ、しかして主を讃へ祝ふべし、永しへに。

なんぢ四方の空よ、主を讃へよ、ほめよ、祝へよ、永しへに。
主をたたへよ、なんぢら主の天使たちよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
天のうへなるすべての水よ、主をたたへよ、ほめよ。祝へよ、永しへに。
主の萬軍よ、主をたたへよ、ほめよ、祝へよ、永しへに。
日と月よ、主をたたへよ、ほめよ、祝へよ、彼を、永しへに。
天のすべての星よ、主をたたへよ、ほめよ、祝へよ、永しへに。
雨と露よ、主をたたへよ、ほめよ、祝へよ、永しへに。
すべての風よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
火と熱よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
霰と雹よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
日と夜よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
光と闇よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
氷と霜よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
成熟と雪よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
電と雲よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
地よ主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
山と丘よ主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
すべて、地より生ふるものよ、主を讃へよ、祝へよ。永しへに。
なんぢら泉よ、主をほめよ、祝へよ、永しへに。
海と水のながれよ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
鯨としかしてすべて水のなかに動くものよ、主を讃へよ、ほめよ、祝へよ、永しへに。
空のしたなるすべての鳥よ、主を讃へよ、ほめよ、祝へよ、永しへに。
すべての野の、また飼はれたる獸よ。主を讃へよ、ほめよ、祝へよ、永しへに。
なんぢら人の子よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
イスラエルよ、主を讃へよ、彼をほめしかして祝へよ、永しへに。
なんぢら主の祭司らよ、主を讃へよ、彼をほめしかして祝へよ、永しへに。
なんぢら主の僕よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
なんぢら義しきものゝたましひら、こゝろたちよ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
おゝなんぢら惱みなげきてある聖とき人人よ、主を讃へよ、彼をほめよ、祝へよ、永しへに。
おんみは讃へらる、主よ、天の高きにいまして祝はれ、しかして榮えあり高く永しへに擧げらる。[2]」

このあらゆる被創造物のシムフォニーには関けてゐる音は一つもない、あらゆるものはケルビム（ケルブ）より原子に至るまで共に大いなる讃美の歌を合唱する。朝また朝、年また年、フランシスはあるひはひとり、あるひは兄弟らとゝもに彼らの祈禱書を開いて日々によろづの物が創造の主にささぐる讃歌を歌つた。その詩味（ポエジー）は早くよりまつたく彼を擒にした、そして一二一三年に彼はサン・ジェミニとボルカリアのあひだに一つの小さき禮拜堂を建て、そして祭壇のアンチペンディウムの布にかやうな章句を書かせた、「主を畏るるものはみな彼を讃へまつれ。主を讃へまつれ、天と地よ。主を讃へまつれ、すべての河よ。主を讃へまつれ、萬づの被造物よ、ありとあらゆる天の鳥よ、主を讃へまつれ。」フランシスがベヴニヤで鳥に說教した言葉も同じ觀念に基づいてゐる、鳥たちは彼らのためによく心を用ゐたまふ善良な創造者を讃へ祝福すべき務めがある、あらゆる物にとつて存在するといふことは疑ふべからざる幸福であり、そして彼らの父に與へられた生命のために感謝することは彼らの單純な孝悌の務めである。

聖フランシスの自然に對する感情は何ごとにつけてもかやうな最善觀（オプチミスム）を正しくするものに傾いた。彼は特別な歡ばしさをもつて存在のなかにあるすべての光りかゞやく、美しい、澄めるものに向つた——光りと火、清き流るる水、花と鳥——この自然觀は半ば象徴的である、フランシスが水を愛するのは、それがたましひを淨くする聖き贖罪を現はし、そしてまた洗禮は水をもつて行はれるからであつた。それ故に彼は水に對しては非常なる尊敬をもつてゐた、彼が手を洗ふときに、彼は地に落ちた滴りを踏まないやうな場所を擇んだ。石や岩石の地を行くときに彼は特別な注意をもつて歩んだ、何となれば彼は礎と呼ばれた人のことを思つたからである。森で木を伐る兄弟らには樹の一部分を殘して置くことを命じた、それはその木が再びキリストの十字架の譽れのために芽を出すことがあるかも知れない希望であつた。彼は園を作る人に命じて花を植ゑる床をつくらせた——兄弟らにシャロンの野の百合なる彼を思ひ出させるために。

けれど彼は純に直接な自然の愛をもつてゐた。火と光は彼にとつてはことに美しく見え、そして彼は蠟燭を滅しあるひは燈火を消すことに忍びなかつたくらゐであつた。修道院の園には庖厨用の蔬菜のほかにまたなほ薫りの佳い藥草や「われらの姉妹なる花」のために處を設けなければならない、そしてそれらの美しさを見るものはみな神を讃へる心を起すやうにした。グレッチオで彼はやさしく慈しむやうに「われらの兄弟なる駒鳥」の雛のうへに身を屈めた、そしてシエナでは野鳩のために巣をつくつた。彼が道の上に地蟲が這つてたよりなささうに蠢めいてゐるのを見ると、彼はそれを手に載せて側らに遣つて人に踏み潰されないやうにした。冬にはフランシスは蜜蜂の糧となるために巣のなかへ蜜を入れてやつた。

各のの被造物はフランシスにとつては直接に神よりの御言葉ならぬものはなかつた。すべて敬虔なたましひたちのするやうに彼は最高の程度に於て萬物の價値を認識し、そしてそれらに對して何物か貴とく聖といもののやうに尊敬を抱いた。彼はその造られた物に由つて神の本質を理解した、絶壁や岩石の動かしがたい固さと力とを感ずるときに、彼は直接に神がいかに力づよくして頼るべきものであるかを感じた。

みづみづしい朝の花の純潔さ、あるひは一つの巣のなかの小さな鳥のやさしげに開いたくちばしを見たときに、それは彼に神のまじりなき美しさ、その純潔さ、そして創造者の心のかぎりなき溫情とを啓示した。[3]

この感情はフランシスの心を、神に於ける恒なる歡喜と遮るものなき感謝の衝動をもつて滿した。この感謝のうちには萬物が與かるべく、そしてまたそれについて悅びをするやうに思はれた。「我らの創造者は讃ふべきかな、フラテ・ファジアナよ、」と、かやうにフランシスは一人の恩人が彼に贈つたこの珍らしい鳥に向つて曰つた。そしてファジアナ鳥はフランシスの許に留まり決してほかの人に飼はれようとしなかつた。「神の讃美を歌つてごらん、妹よ、蟬よ、」彼はボルチウンクラで橄欖の木かげで呼びかけた、そして姉妹なる蟬はフランシスが止めよといふまで歌つてゐた、野の獸は屢ば彼の伴侶となつた、一例を擧げると、トラジメネの湖の島にゐた兎、グレッチオの野兎のこと、シェナの近くで彼は一群の羊に圍まれた、おとなしい獸は彼のまはりに集まつて、そして彼に何ごとをか語らうと欲するやうに鳴いた。リエティの湖の上を舟で渡つたとき彼は一尾の生きた魚を贈られた、彼はそれを水の中に放した、そして永いあひだ魚は舟のあとを慕つてきた。同じ土地で捕へられて彼に與へられた一羽の鳥は彼が言葉をもつて立ち去れと命令しないうちは彼のもとを去らうとしなかつた。

けれど何ものよりもフランシスは太陽の惠みに感謝した——太陽とそして火に。

彼はつねに謂つた、「朝に太陽ののぼるとき、すべての人を神を讃へなければならない、その太陽を我らの用ゐるために造られた主に、何となればそれがあるために萬づの物は我らに見えるやうになつたのである。けれど黄昏には夜となるときに、すべての人は神を我らの兄弟なる火のために讃へなければならない、それは夜我らの目に光りを與へるからである。何となれば我らはみな盲ひたものと同じである、けれど神はこの二つの兄弟たちによつて我らのまなこに光を賜はつた。」

この情調から太陽の歌は出てきた。サン・ダミアノの小屋にフランシスは盲人のごとく横はり、そして太陽も火の光も見ることができなかつた。そしてある夜彼の苦しみはあまりに大きく、彼は彼の惱みに於いてつひに神に向つて叫んだ、「主よ、私を助けて下さい、さうして私が忍耐をもつて私の病ひに堪へ得られるために！」

そのときたましひのなかに答へがあつた、「われに語れフランシスよ、何人かが汝にこの苦しみの報いとして全世界もそれに比べては何物にも値せぬほどの寶を與へたならば汝ははなはだ悅ぶであらう？」フランシスは答へた、「然り。」けれどその聲は言葉をつゞけた、「それならば悅べ、兄弟よ、そしてこのいたつきと惱みのあひだにも歌へ、天の王國は汝のものであるから！」

つぎの朝フランシスははやく起きて彼の近くにゐた兄弟たちに曰つた、「もし皇帝が私にローマの帝國全部を與へたならば私は大いに悅ばなければならないであらう。けれど今主は、私が低くこの世に生きてゐるあひだにさへも、天の國を約束して下された。そしてそれ故私はこの艱みのあひだにもたのしくよろこ

び、そして父と子と聖靈なる神に感謝するのが適當である。されば私は彼の譽れ、汝の慈さめ、そして我らの隣人の德を建てるために一つの新しい歌をつくつて主の造られた萬づの物を讃へやう、何とならば、我々は日々萬づの物を用に供へ、それなくしては生くることもなしがたく、それをばしかしながらしばゝ正しからず用ゐてそれがために創造者をいたましめたのである。そして我らはつねに感謝なく日々我らに示される恩寵と惠みを思ふことなく、そして我らは我らの爲すべきがごとくに主、われらの創造者、しかしてあらゆる善きものを與へたまふ主に感謝することをしないのではないか。」

そしてフランシスはすわつてそして思つた、しばらくして彼は「太陽の歌」の最初の言葉を叫んだ、

Altissimo, onnipotente, bon Signore, 「もつとも高き、全能なる善き主よ。」

けれどこの歌が終りまでつくられたとき彼の心は慰安と悅びに滿ちてゐた。そして彼は直ちにフラテ、チフィコが若干の他の兄弟を伴つて世界に出で行くべきことを欲した。そして何處にてもあれ彼らが在るところに彼らは止まつて新しい讃美の歌をうたひ、そして神の僕として彼らは聽衆からかつけ物をこふ、そのかつけ物は卽ちこれを聞いたものは悔い改めてよき信徒となることに外ならぬ[4]。そして「太陽の歌」そのものはこれである——

Altissimo, onmpotente, bon signore,

Tue so le laude, la gloria, el honore et onne benedictione.

Ad te solo, Altissimo, :e konfano.

et nullu homo ene dignu tu mentouare.

Laudato sie, Misignore, cum tucte le tue creature,

spetialmente messor lo frate sole,

lo quale iorno et allumini per noi.

Et ellu e bellu e radiante cum grande splendore

de te, Altissimo, po.ta significatione.

Laudato si, Misignore, per sora luna e le stelle

in celu lai formate clarite et pretiose et belle.

Laudato si, Misignore, per frate vento

et per aere et nubile et sereno et onne tempo,

per lo quale a le tue creature dai sustentamento.

Laudato si, Misigno e, per sor aqua,

la quale e molto utile et humile et pretiosa et casta.

Laudato si, Misignore, per frate focu,

per lo quale enallumini la nocte,

ed ello e bello et iocundo et robustoso et forte.
Laudato si, Misignore, per suo nostro matre terra,
la quale ne sustenta et governa
et produce diversi fructi con coloriti fiori et herba.
Laudate et benedicate Misignore et rengratiate
et serviateli cum grande humilitate.

もつとも高き、全能なる、善き主よ、
讃へ、榮え、譽れとすべての祝福はおんみのものなり。
たゞおんみにぞ、もつとも高きものよ、それらは屬し、
しかして何人もおんみの名いふ値ひなし。
讃へられむ、わが主よ、すべておんみの被造物をもつて、
わけて兄弟なる太陽の君をもて、
彼は晝をてらしよりてわれらにひかりあらしむ。
しかして彼は美しく、大いなる輝やきをもて光り、
もつとも高きものよ、おんみのみすがたをあらはす。

おんみは讃へられむ　わが主よ、姉妹なる月と星たちのために、
おんみは彼らを御空に清らにたふとく美くしくぞ造りたまへる。
おんみは讃へられむ、わが主よ、兄弟なる風のために、
しかして空氣と雲と、晴れたるまたすべての空のために、
これらによりておんみは萬づの物にいのちをたもちたまふ。
おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹なる水のために、
これはいと益あり、謙だれる、たふとく、潔きものなり。
おんみは讃へられむ、わが主よ、兄弟なる火のために、
これによつておんみは夜をてらしたまふ、
しかして彼は美しく、樂しく、健やかにして力づよし。
おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹われらの母なる地のために、
彼女はわれらをさゝへしかして載せ、
さまゞの果實と色彩られたる花と藥草とゝもに生みいだす。
わが主を讃へ、祝ひしかして感謝せよ、
しかして大いなる謙だりもて彼に仕へよ。

1「小さき花」十九。「完全の鏡」一〇〇。病の醫療を求めざることについては、「完全の鏡」四二。
2「火に燒かるる三人の歌」舊約全書ダニエル書の第三章に屬すべき者として「アポクリファ」の中に收められてゐる。
3「完全の鏡」一一六、一一八、一一九。
4「完全の鏡」一〇〇、一二〇。「太陽の歌」の原文はベェメルの Amulekten, p. 65. に原來の形をもつて出てゐるのを引用する。

七　フランシスの最後の手書、病、死

一二二五年四月の末にローマに起つた暴動のために逐はれて法王ホノリウス三世は市を去つてティヴォリにしばらく滯在したあとで住居をリエティに移しそこに一二二六年の始めまで留まつてゐた。前よりますます熱心にエリアはフランシスに法王の宮廷に行くことをすゝめた、そしてこの勸告にはウゴリノもまた後援をした――それは宮廷にゐる熟練な醫師たちによつて眼の病を癒やすためであつた。遂に一二二五年の夏に、フランシスはサン・ダミアノを去りキアラと姉妹に別れを告げた。彼がつぎにある形式で最後の遺言を彼らに殘したのはこの折であつたらう。

「我、フラテル・フランチスクスは我らの最高の主イエス・キリスト及び彼の最も聖なる母の生活と貧しさに從ひ行かむことを欲し、しかして我は最後までこのことを爲さむとす。しかして我はおんみらに、わが貴女たちよ、請ひ、しかしておんみらに忠言す、おんみらはつねにこのいと聖とき道と貧しさのうちに留まらむことを。しかして心しておんみらは何人の忠言あるひは教へありともこの生活の道を棄てざることを思へ。」

このたびはフランシスは徒歩して旅したにちがひない、彼がサン・ダミアノにゐたときにキアラは彼のために一足の履を製つて、それは彼の烙印にも係らず足を運ぶことのできるやうにしてあつた。テルニより彼は昔の道を經て谷を過ぎた――その道は彼の熟知してゐるなつかしい道すぢであつた。ポッジョ・ブストネとリエティのあひだで彼はサン・ファビアノの小さい寺院（今はラ・フォレスタの修道院）の牧師のもとに留まつた、そして彼の到着の知らせが町のなかに聞えるや否や人々は大群をなして彼に逢ふために集つてきた。さて不幸にしてフランシスが宿つてゐた家まで行く道は牧師の小やかな葡萄園のなかを通つてゐた、そして町の人と群衆は例のかやうな場合によくあるおかまひなしをもつて、貧しい牧師の植ゑた葡萄の熟したのを摘んで渴きを療した。牧師はたゞ悲しみながらこの掠奪を傍觀してゐた、やがて彼はフランシスに愁訴した。「この葡萄畑から取れたので小瓶に十三杯の葡萄酒が釀せるのです、」彼は憂はしげに曰つた「そしてそれが私の一年間の飲料に十分だつたのです。」フランシスは彼を慰さめて、此の季節にもやはりいつもだけの葡萄酒がきつとできるからと豫言した、そして實際に葡萄はこの年は前よりももつとよく實つて、牧師は最後に二十瓶を得たといふことである。

このゝちフランシスはしばらくのあひだリエティにサラセン人テダルドの家に宿つた、これはワッディングの言に據つたのである。こゝにゐたときのこと、フランシスはあるタフラテ・パチフィコを呼んで、一つのチテラを借りてきてこれの調べに合せて「太陽の歌」をうたふことを命じた。けれどパチフィコは歌と彈奏をもつて家内の人の眠りを妨げることを恐れて、そのことを曰つた。「それではそんな考へはおやめにしやう、」フランシスは曰つた、「力弱き兄弟を妨げるのを避けるためには多くをみすてなければならない。」

その夜フランシスは床に臥して眠りつかれず、痛みのために目を閉づることができなかつた。家のそとには歸り遲れた彷徨者が家路に急ぐのが聞えた、つひにものみなは靜かになつて、たゞ寺院の鐘が折々夜をわたつてその聲を響かすばかりであつた。そのときフランシスは彼のゐる窓のそとに一つのチテラの絃の軟かい顫への音を聞きつけた、そして何人かは外で奏ではじめた。彈奏は永い、永いあひだつゞいてゐた——あるひはまつたく近く、あるひはすこし距つて、恰かも奏づる人が窓の下をかなたこなたと往きつかへりつしてゐるごとくであつた。歡びにあふれ、心を奪はれ、しづかな、涼しい秋の夜のなかに流れたえぬ音樂に醉はされつゝ、フランシスはそこに臥して耳を傾けた、そして朝となつたとき彼はフラテ・パチフィコに曰つた、「主はこのたびもまた私を忘れずゐて下された、そしていつもなされるやうに私を慰めて下された。汝のかはりに彼は一人の天使を遣はして夜中私のために音樂を奏でしめ給うた。」

冬が來たときフランシスはリエティを去つた、そしてサン・エレウテリオの隱者小屋に行つて、そして疾患と酷寒にも係らず彼は着衣の裏に毛皮を縫ひつけることを許さなかつた。多分クリスマスの頃に、彼はフォンテ・コロムボに赴いた。

そのあひだに法王の侍醫たちはありとある醫療の手段をつくして彼に手當した——繃帶、膏藥、石膏、そしてその一つとして効がなかつた。彼らはまた彼の全生活方法を改めやうと試みた、そしてこゝに於ては彼らはある程度まで成功した。「あなたの肉體は生涯のあひだあなたに善く仕へた從順な僕、助力者ではなかつたのですか?」彼らはフランシスに問うた、そして彼は「兄弟なる驢馬」に善い性質を認めないわけに行かなかつた。「それではその返禮にあなたはどんな待遇をなさいましたか?」と彼らはなほ問うた、そしてフランシスは彼の待遇が善いとはいはれないことを承認した。悲しみに食ひ入られて、彼は自己のうちに引き入り、そして叫んだ、「悅べ、兄弟なる肉體よ、そして私を赦してくれ、今こそ私は汝の欲しいやうにして悅ばしてやらうから!」けれど後悔の多くの場合と同じくこれもはや時の遲れたときに來たのであつた。

醫師たちは果敢なる手段をとることにきめて、兩のこめかみに赤く灼いた鐵を當てる灼燒法を試みた。この時代の考へによればかやうな手段はきはめて効果のあるものとされてゐた、それは外の場合には恐水病なぞにも應用されてゐた。醫師とその助手とが赤熱の鐵を入れた爐をもつてフランシスに近づいてきたとき、彼はその上に十字架の印を畫いて、そして曰つた、「兄弟なる火よ、汝は他の多くの被造物よりも貴とく、そしてもつと有益なものである。私はいつも汝に親切にしてゐた、そしていつまでも親切にしやう

と思ふ、それは汝を造られた主を愛するが故である。さて今は私に對して溫順しく禮儀正しくあつてくれ、そして私が堪へ忍ぶことのできないほど燒いてくれるなよ。」

醫師は灼燒手術を始めた。そして兄弟たちは鐵の下にぢり〳〵と音をたてゝ生ける肉の焦げるのを聞いたときみな遁れた。それが終つたときフランシスは曰つた、「もしそれで燒くのが十分でなかつたのならばもう一度燒いて下さい、私はすこしも苦痛を感じませんでしたから。」

この醫師はフランシスと眞の友情を結んだらしい。彼は好んで屢ば兄弟らとその驚くべき師のことを語つた。彼はあるとき曰つた、「私には不思議に思はれます、私はほかの人の說敎をばよく覺えてゐられますけれど決してフランシスの說敎を覺えてゐることはできません。たとひ私が何か覺えてゐるにせよ、それはもはやそれではありません。」

あるとき診察が永くつゞいたときフランシスは醫師を晝餐まで留めやうと思つた。そのとき兄弟たちは彼らが自身のためにさへ十分なものをもたず、そしてまして外來の人に備へるほどのものはないと曰つた「行つてあるだけのものを供へて置け、」フランシスは命じた、「そして同じことを二度と私に曰はせないやうにしてくれ。」そして彼らが食卓に就くや否や戸を音なふのが聞こえて、一人の老婆が外に立つてゐて、手には最良の食物——質の佳いパン、魚、豌豆、蜜、葡萄を滿した籠をもつてゐた。[1]

この醫師の勸告によつてであらう、フランシスはのちに冬になつてから寒いフォンテ・コロムボを去つて中世の頃からすでに溫和な空氣をもつて名高つたシエナの町に移つた。彼處に行くみちでフランシスと兄弟たちは、サン・キリコオとカムビリヤのあひだの野で、全たく同樣な姿をした三人の女が、彼らの小さい一群が過ぎてゆくときに頭を低れて挨拶し、そして聲をそろへて「貴女貧しさに榮えあれ、」と呼ぶのに逢つた。この遭遇とそしてこの珍らしい挨拶は永いあひだフランシスと兄弟らの心に刻まれた。

シエナに於ける療養はリエティに於けるそれよりも多くの効果がなかつた、けれどこの滯在はフランシスのためになつた。彼はアルベリノ（今のラヴッチアノ、シエナのすこし北）の隱者小屋にゐた、そしてここで彼はあるとき、多くのうちにも一人のドミニクス派の人の訪問を受けた、この人は、聖フランシスそ人の地位にも關してゐるのであるが、エゼキエルの言葉「もし爾神を信ぜざるものに向ひ彼の不信を宣べ告げざらば、われは彼の血をば爾が手に要むべし、」とあるのについて解釋を求めた。「私は死すべき罪のなかに生くるものゝ多いことを知つてゐます、」惱めるドメニカンは曰つた、「そして私はこれを彼らに曰ひませぬ。これらのたましひはみな私の手に要められるのでせうか？」フランシスは彼の思想の常の態度で答へた、「善に於ける生活は信ぜざるものに對して最も良き說敎である、そして神の豫言者に與へたまふ使命はかやうな模範によつてもつともよく行はれるのである。[2]」

ドメニカンの人の質問はフランシスに意外なつよい印象を與へた。ある夜彼は兄弟たちを呼び起して、そして彼らに曰つた、「私は神にこのことを告げたまへと願つた、いかなる時私は彼の僕でありそしていか

なるときそれでないのか――何となれば私はまことに彼に仕へることのほか何も欲みも願ひもしないからである。そして主は私に恩寵を示したまはり答へられた、『汝は眞に實に私の僕である、汝が宜しきに適へるやうにすべてを思ひ、語り、行ふときには。』されば汝たちはもし私がそれをしないときには私を恥しめることをして可いのである。[3]」

シエナにゐたときに彼がまた新たに兄弟たちにむかつて貧しさのつとめをくりかへし教へたときのこともこれに應ずるのである。セル・ボナヱントゥラといふ人は新しい修道院を建てるために一つの地所を贈つた。フランシスはその建設のためにつぎの掟を與へた、

兄弟らは現在必要に迫つてゐる以上に決して土地を受けてはならない。つぎに彼らは地方の僧正の許可なくして建築をしてはならぬ、「何となれば主は我らをローマ教會の僧職らの助けとして召したまひたればなり、」そしてそれは彼らに反抗して行爲するためではなかつたからである。フランシスは自らこれについて最上の模範を示した、彼はイモオラに於て市中に説教する許可を乞ひ、僧正の許に行つたとき、「私が説教すればそれで澤山だ、」と答へたときすぐに引き返したことがある。

僧職の許可を得たのち、兄弟らは土地のまはりに深い溝を掘り、そして溝のうしろに茂つた生垣を植ゑる、けれど彼らはそこに壁をつくてはならないのであつた。生垣のなかに室(チエルレ)は泥と小枝をもて建てらるべくそこには大いなる會堂を設けずたゞあはれな小さい禮拜堂ばかりであつた。

聖フランシスの健康に現れた良好の狀態は永續しなかつた。ある夜は彼は惡性の出血を見た、そして兄弟らは彼が將に死ぬのだと思つた。泣きながら彼らは彼の臥床のまはりに跪づいて、そして彼に最後の祝福を乞うた。フランシスは知覺を恢復するや否や、彼のミサを讀む司祭、フラテ・ペネデット・ディ・プラトをして羊皮とペンと墨とをもち來らしめた。「書け、」彼は曰つた、「私が團體にあるすべての兄弟ら、また今より世の終りに至るまで團體に入らむとするすべての人を祝福することを。そして彼らが私のこの祝福を受けた印として、そして私のかたみとして、私は彼らにこの遺書を遺こす、それをもつて私が彼らを愛したごとく、今なほ愛するごとくに、彼らはつねに互ひに愛しあひ、そして彼らはつねに私たちの貴女なる貧しさを愛し敬ふため、そして彼らがつねに私たちの聖とい母なる教會の諸職と僧職らに誠をもつて從順なるべきために。」これらの言葉を口授したのち フランシスは「いつもカピトロ集會にて爲したやうに」彼らすべてを祝福し、そして兄弟らの多くは思ひに沈み、そして彼らが再び歔泣したとき、彼はものうげに眼をとぢた。[5]

けれどそれはまだ最期でなかつた――フランシスが眞摯に「姉妹なる死」を歡び迎へることのできるまでにはなほ六ケ月を經るのであつた。今のあひだは彼は「姉妹なる病ひ」に對して爲すべきことが多くあつた。フラテ・エリアの世話で彼はコルトナに近いチエルレに移された、こゝでは水腫が起つて彼の惱みに加ふるに下半身、脚は脹れてきた。胃はもはや食物を保つことができなくなり、膵臓と肝臓に激しい痛みが

起つた。フランシスは唯一つの欲みをもつてゐた――彼の死ぬまへにアッシジを一目見たい！ そしてエリアはこの願ひをかなへた。ペルジアの住民が襲つて病者を（それによつてすべての人がフランシスに認めた聖者を）奪ふことを恐れてエリアは迂回した道筋をとつて、生きたるあひだから多くの人の渇望する遺物（レリクイエ）であつた彼らの師の身體を運んだ。グッビオとノチェラを經て、彼らは今エレミタの修道院のあるバニ・デイ、ノチェラから遠からぬところへ來た、こゝに彼らはアッシジから彼らを迎へ、そして途中を護衛するために派遣された一隊の武裝した人々に遭つた。同じ日の眞晝に彼らはアッシジの領地内に入り、そしてサトリアノの村（今はサッソ・ロッソの下にある寂しい農村でバッビアノにすぐ近くである）に留まつた。

フランシスはこゝで賓客として一私人の家に迎へられた。兵士らはそのあひだに村へ行つて已れらのために食物を買はうと思つた。何人も彼らに一物をも賣らうとしなかつた、そして彼らはふくれ面をして腹を空して歸つてきた。「さうだ、汝が役にもたゝぬ蠅（金錢のこと）を賴みにした結果はそれだ。けれどためしに此度は戸ごとに行つて神の御名に於て少しばかりを惠まれることを乞へ、さうすれば汝たちは欲しいものが得られるだらうから。」これは果して事實であつた。

暮れがたになつて行列はアッシジに入つた。病める人は僧正の住居に運ばれた、そしてペルジアの人たちがアッシジの聖者を奪はうとするのを防ぐために家の周圍には衞兵が置かれた。

聖フランシスの身命を保護することについて、アッシジの寺院と市政の權力者がかやうに一致したとき、一方に他の問題ではかやうな感情の融和といふものなかつたのである。フランシスが市の內政について聞いた最初の知らせは、市長（ポデスタ）と僧正とが公けに爭つてゐることであつた。僧正はポデスタに放逐を宣告した、そしてポデスタはその返報として市民に僧正と關係することを禁じた。「それは私たち神の僕にとつて大なる恥ぢではないか、」フランシスは兄弟らに曰つた、「こゝで何人も平和をもたないといふことは！」そして彼の能ふかぎりをなすために彼は「太陽の歌」に更に二つの章を添加した、そしてそのとき一人の使者をポデスタに遣して僧正の家に來らしめ、そして一人を僧正に遣した。招かれた二人は來てピアッツア・デル・ヴェスコヴド――十九年前にフランシスが彼の衣裳を父に返したと同じ場所である――に會合した。そして人々がみなそこに集まつたとき二人の小さき兄弟は進み出て、フランシスが自から作つたとほりの「太陽の歌」をうたひ、つぎに新しい章を歌つた、

Laudato si, Misignore, per quelli ke perdonano per lo tuo amore
et sostengo infirmitate et tribulatione,
beati quelli kel sosterrano in pace,
ka da te, Altissimo, sirano incoronati.

おんみは讃へられむ、わが主よ、おんみの愛のために赦し、
病ひと艱みを堪へしのぶものによりて、

これらを平和もて忍ぶものは福なるかな、
そは、もつとも高きものよ、おんみによりて彼らは冠せらるべければ。

二人の兄弟が歌つたとき、あらゆる人はみな寺院で福音の讀誦を聞くときのやうに手を組んで立つてゐた。そして歌がをはり最後の Laudato si, Misignore. がもはや聞えなくなつたとき、ボデスタは一足すゝみ出て、僧正ギドーのまへに身を倒して曰つた、「われらの主イエス・キリストと彼の僕フランシスに對する愛の故に、私はあなたを心の底より赦し、そしてあなたのよしと思つたとほりにあなたの意志を行はうと思ひます。」

けれど僧正は彼の敵の上に身を屈めて、彼を扶け起した、そして彼を抱き、接吻してそして曰つた。「私の職として私は謙つて平和でなければなりません。けれど私は生れつき怒りやすく、それ故あなたはそれに對して寛大であつて頂きたい。」

そして兄弟らは内に入つてフランシスに彼が歌をもつて爭へる惡しきたましひらの上に克ちえた勝利を語つた。[6]

このときにあたつて病める人は彼にはもはや生くる時の殘りがたゞ僅かであることをあきらかに認識しなければならなかつた。ある日彼は彼に侍つてゐる醫師、ボンジョヴンニと曰ふアレチノ人に、確かな眞實のことを話せと願つた。「神様のお助けによつて御容體はよくなりませう、」と答へは眞を避けて曰つた。

「眞實のことを語れ、ベンベニヤトよ、」フランシスは曰つた、彼は常にこの醫師をかう名づけた、何となれば「善きジョヴンニ、」といふ實名を用ゐれば、それは彼には聖書の言葉「一人のみ善し、卽ち神、」に牴觸するやうに見えたからである。同樣な根據から彼は何人をも師と呼ばなかつた、それは馬太傳二十三章十の言葉と牴觸するのを憚つたのである。

醫師はフランシスには眞を語らなければならないことを識つたときに、彼は包まず語つた、「私は思ふにあなたはまだ九月の末あるひは十月のめ始まで生きられます！」フランシスはしばらく言葉なかつた、やがて彼は手を擧げて叫んだ、「さらば、歡び迎へむ、姉妹なる死よ！」そしてこれらの言葉が詩人的な泉をたましひのなかにふたゝび開いたかのやうに、彼は彼の「太陽の歌」にこの最後の章を加へた、[7]

Laudato si, Misignore, per sora nostra morte corporale'
da quale nulln homo vivente po skappare
Guai acquelli ke morrano ne le pecenta mortali.
Beati quelli ke trovvrane le tue sanctissime voluntati'
ka la morte secunda nol farra male.

おんみは讃へられむわが主よ、姉妹われらの肉體の死のために、
生ける人はいづれも彼女よりのがるゝあたはず、

禍ひなるかな、おそろしき悪しき罪のなかに死ぬるものは、
福ひなるかな、おんみのもつとも聖とき御旨をさとりえしものは、
そは第二の死は彼らに害をなさゞればなり。

このときよりフランシスはフラテ・アンジェロとフラテ・レオネをつねに彼の傍らに在らしめて、いつでも彼の好むときに「姉妹なる死」の歌をうたはせた。今はフラテ・エリアが出て來て、かやうにたえず歌を唱はせるのをやめて外聞を慎んでくれと警告したのは無効であつた、「下には番兵が居ります、彼らがあなたの室のなかで歌や樂器の音ばかりするのを聞いたならば、あなたを聖者だとは思ひますまい」彼は曰つたのである。フランシスは今まで十分永いあひだ人に屈し從つてきた、今は彼が死に垂むとしてゐるときに彼は少くも彼自らの仕方で死ぬことを許されたいと願つてゐた。「聖靈の恩寵によつて、」彼は曰つた、「私は主と神にまつたく一つになつたのである、されば私は彼に於て歡び樂しむことができる。」

けれどそれはたゞ歌をうたふのみの時ではなかつた——それはまたフランシスにとつては彼の家を整理する時であつた。最後の幾週のあひだに彼の思ひはつねに二つの處に飛んだ、ラ・ゼルナ、リエティの谷、ポルチウンクラ、カルチェリに在る忠實な兄弟たちへ、そしてサン・ダミアノなるキアラと姉妹たちへ。

アッシジの僧正の住居からサン・ダミアノへ下る道は遠くない。キアラが屢ば使者を遣はして彼に來よと請うたこと——そして彼女は彼に告別することができやう、けれどそれはもはや不可能であつた。彼は彼

女のもとに最後の祝福を書き送るのみで滿足しなければならなかつた、「姉妹キアラに曰へ、」彼は書簡を携へて行くべき兄弟に曰つた、「私は彼女があるひは神の子のまたは私の命令に背いたことがあらうともそれをみな消滅せしめる、そして彼女は今すべての憂ひと惱みをすてなければならない、何となれば今彼女は私に逢ふことはできない、けれど彼女の死ぬまへに、彼女と姉妹たちは私を見ることを得、そしてそれによつて大いなる慰安を得るであらう。」フランシスはたしかに自から——恰かも爲されたるごとくに——彼の遺骸を死後にサン・ダミアノに運ばせることを定めたのであらう。[8]

今殘るは兄弟らにむかつて一言別れの餞けをすることであつた。そして彼の遺書はそれであつた——この驚嘆すべき文に、そのなかにフランシスは彼の死の床より生涯を見わたし、憂欝と歡喜をもつて彼の悔い改めのみづみづしき曙の第一の時を憶ふ、けれど彼はまた悲しみをもつて來るべき年々が何を彼の忠實やかな弟子たちに持ちきたすべきかを思つた。また一たび彼はこゝに短かい印象的な章句のうちに一般集會や書簡のうちに書き與へた誡めを集めるのである。

『主はかくてわれ、フラテル・フランチスクスに贖罪を始めよとて與へたまへり、そはわれ罪のなかに在りわれにとりて癩病患者を見ることは甚しき苦しみなりしときなり、しかして主は自からわれを彼らのあひだに導びき入れたまひわれを彼らを憐れむ心を與へたまひぬ。しかして彼らのもとを出でしときはじめわれを痛ましとしものはわがためにたましひと肉體の快美の感に變りぬ。しかしてそのゝちわれはたゞ暫し

止まりしが浮世を脱れたり。主はわれに教會を信ずる心を與へたまへり、さればわれはひたすらに祈りてただ曰ひぬ、われらきみを崇む、主イエス・キリストよ、こゝに於てもまた世界にありとあるきみが教會に於て、しかしてわれらきみを祝ひまつるなにとなればきみの聖とき十字架によりてきみは世界を贖ひたまひたればなり。」

のち主は我に、聖ときローマの教會の法によりて生ける僧職なる人々に對するかゝる信頼を與へたまひぬ、こは今に至りても變ることなし、さればもし彼らわれを責むることありとも、われは彼らにぞ助けを求めむ。しかしてもしわれソロモンに等しき智慧をもちたりとも、われはこの世の甚だ貧しき牧師に逢ふとも、彼らの教區に於ては彼らの承諾なくして説教せざるべし。しかしてわれはかゝるまた他の司祭らを恐れ、愛し、敬ひてわが主人のごとくせむ。しかしてわれは彼らの罪を知るを欲せず、何となればわれは彼らのうちに神の御子を知り、しかして彼らはわが主人なればなり。しかしてわがこれをなす所以は、われはこの世にて高ききわみなる神の御子を肉體ある姿にて見ることなし、たゞ僧職らが受けしかして彼らのみこれを他人に交附する聖體と聖血の形に於てのみなり。しかしてこれら最も聖とき神祕をばわれはあらゆるものゝ上に譽め、敬ひしかして貴とき處に置かむと欲す。最も聖とき御名および書かれたる道(ことば)をばいづこにてもあれ適應せざるころにあるを見出さば、われはこれを集め、しかしてこれを適當なるところに貯ふることを乞ふ。しかしてありとある神學者あるひは最も聖なる神の言葉を知れるものをば、われらに精靈と生命と與をふる人々と同じく讃へ敬ふべきなり。

しかして主われに若干の兄弟を與へたまひしのち、何人もわがなすべきことを示すものなかりき、しかれども高ききわみなるものは親からわれに聖とき福音の形によりて生くべきことを啓き示したまへり。しかしてわれはこれを少なき單純なる言葉もて書きぬ、しかして君なる法王はわがためにこれを保證したまへり。しかしてこの生活を受けむがために來れるものは、持てるものをみな貧者に與へ、しかして一領の衣の内外に綴りたるもの、一つの繩帶と下帶をもて甘んじたり。しかしてわれらはこれより多くを所有することを欲せざりき。

われらのうち司祭なるものは他の司祭らと同じく勤行をなし、俗人はたゞ「われらの父」を唱へ、しかしてわれらはよく好んで寺院のうちに在りたり。しかしてわれらは無智にしてすべての人に從屬せり。しかしてわれはわが手をもつて働らき、つねに勞働を願ふ、しかしてわれは他の兄弟らみな正しき性質なる仕事に勞働せむことをことに強く願へり。勞働を知らざるものはそれを學ぶべし、されどそは貪欲のためならずして模範のため、しかして惰たりを避くるためなるべし。しかしてもしわれらの勞働の價ひがわれらに與へられざることあらば、われらは戸ごとに施しを乞ひて主の食卓に向はざるべからず。

主はわれに一つの挨拶を示したまへり、さればわれらは「主は汝に平和を賜ふ」といふべきなり。兄弟らをして愼ましむることは、彼らいかなることありとも、寺院、住家、あるひはその他彼らのために建てら

れたるものを受くべからず、たゞこれらが、われらの掟に約したるごとき聖とき貧しさに適する場合には許さる、われらはつねにこの世に順禮のごとく、旅人のごとく生活すべし。

われはまたこのことをすべての兄弟らに對して從順の固たき偶條たらしむ、何處にありとも彼らは單獨にもあるひは仲介を經るも、ローマのクリアより文書を得て、寺院あるひは他の處を乞ひ、あるひは說教の名目に於て、あるひは彼らの肉體の迫害せらるゝの故をもつて保護されむと欲することなかれ、寧ろ彼らいづこにても迎へられざればたゞちに他の國にのがれゆきて神の祝福をうけて贖罪をなせ。しかしてわれは固く、この兄弟團體のジェネラレ・ミニストロおよびその他の保護者(グワルディアノ)が何にてもあれわれに命ずることに從はむと願ふ。しかしてわれは彼の手のうちの捕虜となることを欲す、よりてわれに一歩も彼の欲するそとに出でて行爲せざらんためなり、こは卽ち彼はわが主人なればなり。しかしてわれ無智なる病めるものなれども、されどわれは掟に包含せられたるごとき勤行をわがために爲す一個の司祭をわがもとに得んと欲す。

しかしてすべて他の兄弟らをしてかくのごとく彼らの上なるものに從はしめ、掟によりて勤行をなすことを務めしめよ。しかして掟によりての勤行を務めず、他の方法をもて變更せむとするもの、あるひは正教を信ぜざるもの、これらの發見せられたるとき、すべての兄弟はいづこにありとも從順の務めとして、何時かゝるものゝ一人を見出でたりとも、彼らは處の最も近傍にある長上なるもの、これらがいづこに在りとも、これに行きてそのことを啓すべし。しかして保護者、長上なるものは固く從順の務めによりてこの

不信者を繫縛に在る人のごとくに日夜守りて、彼か自からミニストロに進退を任すに至るまで手中を去らしむべからず。しかしてミニストロは固く從順の務めによりて彼を、日夜繫縛に在る人のごとくにして守るべき兄弟らによりてつひにオスチアの君に遣はすべし、これは全團體の君、保護者、しかして匡正者なり。

しかして兄弟らをして「これは新しき掟なり、」と曰はしむることなかれ、何となればこれは一つの覺え書にして、誡め、訓へ、しかしてわが遺書なればなり、これをわれ、小さき兄弟フランシスは汝らわが祝福せられたる兄弟らのためにつくる所以は、われらこれをもつて更に正教に適へる方法に於て神がわれらにつくりたまへる掟を守らむがためなり。しかしてジェネラレ・ミニストロおよび他のすべてのミニストロおよび保護者らは、從順の德によりてこれらの言葉のうちに何物をも增減すべからず。

しかして彼らをしてこの遺書をつねに掟とゝもに携へしめよ。しかして彼らのひらくすべてのカピトロに於て彼ら掟を讀むときまたこれらの言葉を讀ましめよ。しかしてわれは固く從順の偶條としてわが僧俗の兄弟らに對し、彼ら掟にもまたこれらの言葉にも、「それらはかく解釋せらるべし、」とて註解を用ゐることなかれと命ず、何となれば主はわれに掟とこれらの言葉を單純に簡素に書くべく與へたまひぬ、されば汝らもまた單純に簡素にこれを理解し終結まで聖とき力をもつて守るべきなり。

しかして何人にもせよこれらのことを守るものは聖ききはみなる天にゐます父の祝福にみたされ、しかしてこの世にありては彼の最愛の聖子と聖靈の祝福としかして天のあらゆる諸德と聖者たちの祝福をもつ

て滿さるべし。しかしてわれフラテル・フランチスクス汝らの小さきものにして僕なるものは、わが能ふかぎり、內より、外より、このもつとも聖とき祝福を保證せむとす。アメン[9]」

フランシスはこれをもつてできるかぎり行く末について心をつくしたのであつた。中世に於ては法王の文書でさへ必ずしも服從されることは覺束なかつた、そしてフランシスも恐らくは兄弟らが彼の最後の意志に對して從順であらうとは決して大いなる信賴を措くことはできなかつた。けれど彼の良心は安らいだ——彼はこれ以上にできなかつたのである。

感動すべき慈しみをもつて彼は終りまで兄弟たちを愛した。すべて病める人のするやうに病臥してゐるフランシスはさまざまな願ひをもつた。あるとき彼は殆ど何も食べることができなかつた、「けれど魚がすこしあつたならば、」彼は曰つた、「私はそれが咽へ通るだらうと思ふ。」あるときはまた夜なかに彼は肉桂の葉を欲しいと曰つた、彼はそれが効があると思つたのである。不精不精に看護してゐた兄弟はこの甲斐のない仕事、眞暗闇のながで肉桂の葉をさがしに行つた。一度二度ならずフランシスは兄弟らの顏に嫌厭の様子を見たに違ひない、そして時としては彼はさうしてゐるあひだにつまらぬことを氣にしたりしたであらう。「私がかうして寢てゐるのは恐らくは、」彼は思つた、「私の兄弟が怒りの罪を犯す原因となつてゐるであらう。もし彼らが私の世話をせずにゐれば、彼らはもつと多く祈り、そしてもつと規則正しく生活するとができると彼らは思ふであらう。」そしてある日彼は兄弟らを床のかたはらに呼びあつめ、そして彼が惹きおこす不便と煩ひのすべてについて撓まずにゐてくれと乞うた、この煩ひが闘るところば彼の一身のみならず、それは團體のすべてに係つてゐることであつた、「そして汝たちが私のことで忙しくあるとき汝たちの目のまへに、主は汝たちが私のためにつくしたことをみな酬いて下さるのだといふことを忘れるな。」

兄弟らに與へる煩ひを少くするためにフランシスはつひに彼の身をボルチウンクラに運ばせることに決心した。僧正ギドーはゐなかつた——恐らくはかのボデスタとの爭ひの罪を贖ふために、彼はモンテ・ガルゴナに順禮しに行つた。そしてアッシジの市民はこの移轉に反對せずして、護衛兵をつけてボルチウンクラまで送らしめた。

大いなる人々の群に送られて兄弟らは病める人を市から運び出した。僧正の家を出て一行はラ・ポルタッチア、今は鎖された當時の大門から出た。こゝで市の壁に沿うてゆく道でサン・サルヴトーレ・デレ・パレティに行くことができる、それはアッシジとボルチウンクラの路の半ばにある癩病院である。この處、聖フランシスの悔い改めの物語のうちに思ひで多き處に近づいたとき、病者は輿を下させた。「そして私の顏をアッシジの方に向かせてくれ、」彼は曰つた。

そのときしばし深い沈默があつた。そして病める人は兄弟らの扶けによつて身を起した。上の方に山ふところにアッシジの市壁が横はり、そしてその門々と列また列と連なる家がサン・ルフィノとサンタ・マリア・デルラ・ミネルヴを圍んでゐた。市を見下して、恰かも今日と同じくサッソ・ロッソの裸はな絶壁は頂上な

るドイツ風の塔とゝもに立つてゐた。すこしはなれてモンテ・スバジオは青く、カルチエリのあるところである。そしてその麓にサン・ダミアノは隠れてゐた。そしてフランシスと町とのあひだには彼が若年のとき獨り馬を歩ませて大いなる事業をなすことを夢みた同じ大きい平野があつた。この里、この町から彼は出た、そしてこの里、この町に彼は死ぬために歸つてきた……

半ば盲ひた目をもつてフランシスは永いあひだ町や、山々や平野を見つめてゐた。やがて彼は徐ろに手をあげてアツシジのうへに十字架のしるしをかいた。「主によつて汝に祝福あれ、」彼は叫んだ、「彼は汝を選ばれた、これらの主をまことに於て識り、主を榮えしめ、彼の御名に譽れを與へる人々の故郷そして棲家として」そして彼は輿の上に倒れた。そして兄弟らは彼をポルチウンクラに運んだ。

病者はポルチウンクラの禮拜堂の數歩うしろにある一つの小屋に入れられた。こゝで彼は「兄弟ヤコバ」ヤコバ・デ・セッテゾリ夫人の訪れを受くる慰めを得た。彼女が到着したとき、フランシスは恰かも彼女を招く手紙を口授して書かせてゐるところであつた。師父の癒えがたき病の風聞はローマに達した。そしてヤコバ夫人は彼女が自から彼のために織つて作つた僧衣を――それはまた彼の葬衣となつた――携へて、そしてなほ葬りの式に用ゐる蠟燭や香料をもたづさへてきた。女性は決してポルチウンクラに立ち入ることを許されなかつた、けれど「兄弟ヤコバ」のためには例外が設けられた。涙ながらに彼女は最愛の師の臥床の側にひれ伏した――「イエスの足もとなるマグダレナのやうに、」と兄弟らは互ひにさゝやいた。こ

のおとづれはフランシスに力をつけた、そして彼をなほ悅ばすために、彼女は彼の好めるローマの食物、それについては彼が病中にも時々話に出し、またたべやうと願つてゐたものを調へた。フランシスがそれを食べたばかりでなく、フラテ・ベルナルド・デ・クヰンタヴルレもまた呼び入れられて、この常ならぬ美食の一部を受けることになつた。[10]

ヤコバ・デ・セッテゾリのおとづれはフランシスの生きてゐた最後の一週のうちであつた。木曜日は十月の一日であつたが、彼は兄弟らを側らに集めて、その一人一人を祝福した。特に懇ろな愛情をこめて彼はクヰンタヴルレのベルナルドの頭に彼の手を置いた。「書け、」彼はフラテ・レオネに曰つた、「私は私が能ふかぎり欲しそして命ずる、全團體中の兄弟らはベルナルドを、それが私自からであるがごとくに敬ふことを、何となれば彼は私のところへきて、そして所有の財を貧しき者に與へた第一の人であるからである。」フランシスはつぎに兄弟らに最後の誡めの說教をした。殊に彼らにみな貧しさに對して忠實であり、そしてその象徴として貧しき小さきポルチウンクラに對して忠實であるべきことを切に訓へた。「もし人が汝を一つの戸から逐ひ出したならば、そのときは他の戸から入つて行け、」彼は曰つた、「何となればこれは神の家であつて天國の門であるから。」彼は最後に彼の漲りあふれる心のすべてをもつて、たゞにこゝに在らぬ兄弟らのみならず、けれどすべて團體に入るべき兄弟悉くを祝福した。「私は彼らを祝福する、私の能ふかぎり――そして私の能ふ以上にも！」フランシスは恐らくこの Plusquam possum 以上に彼の內心のすべての心

露光量違いの為重複撮影

持をよく曰ひ現はし得たことはなかつたであらう。彼を動かした精神は決してそれが能ふ以上を成就しないうちは滿足することができなかつたのである。そして今最後に於てそれは彼にすこしの安靜もゆるさなかつた。彼は弟子たちを祝福したのち、彼自らを全く着物を脱がせて、そして小屋のなかの裸かの大地の上に身を横へさせた。そこに臥して彼は保護者(クストス)から最後の施物として、彼の死ぬときに着てゐるべき衣を受け、そしてこれが十分に貧しげでなかつたのでその上に襤褸をぬひつけさせた。同じやうにして彼は下穿きと一つの繩と、そして彼のこめかみの傷痕を隱すために冠つてゐた頭巾とを受けとつた。かやうにして彼は最後まで彼の貴女貧しさに對する操を瀆へずして、彼が地上に生れてきたときよりも多くを所有することなしに死ぬことができた。[11]

衰へはてゝ、フランシスは眠りに陷つた、けれど金曜の朝はやく彼は大いなる苦痛をもつてめさめた。兄弟らはたえず彼のまはりに集つてゐた、そして彼らに對する聖フランシスの愛情はなほ一つの新しい表現を求めた。また木曜日——主が弟子たちとゝもに最後の晩餐を開いたその日であると思ひながら、彼は一塊のパンを持つて來させた、そしてそれを祝福して、裂いてその片をすべての人々に與へた。「そして私のところへ聖書を持つてきて洗足木曜日の福音を讀んでくれ、」彼は曰つた。「今日は木曜日ではありませぬ、」と彼らの一人は曰つて聞かせた。「さうか、私はまだ木曜日だと思つてゐた、」彼は答へた。書は持つて來られた、そして夜のあけてゆくとき聖フランシスの死の床の上で聖書の言葉はひゞいた、それのなかに

ジョヴァンニ・ディ・パオロ作

露光量違いの為重複撮影

持をよく曰ひ現はし得たことはなかつたであらう。彼を動かした精神は決してそれが能ふ以上を成就しないうちは滿足することができなかつたのである。そして今最後に於てそれは彼にすこしの安靜もゆるさなかつた。彼は弟子たちを祝福したのち、彼自らを全く着物を脱がせて、そして小屋のなかの裸かの大地の上に身を横へさせた。そこに臥して彼は保護者(ペトロス)から最後の施物として、彼の死ぬときに着てゐるべき衣を受け、そしてこれが十分に貧しげでなかつたのでその上に襤褸をぬひつけさせた。同じやうにして彼は下穿きと一つの繩と、そして彼のこめかみの傷痕を隱すために冠つてゐた頭巾とを受けとつた。かやうにして彼は最後まで彼の貴女貧しさに對する操を瀆へずして、彼が地上に生れてきたときよりも多くを所有することなしに死ぬことができた。[11]

衰へはてゝ、フランシスは眠りに陷つた、けれど金曜の朝はやく彼は大いなる苦痛をもつてめさめた。兄弟らはたえず彼のまはりに集つてゐた、そして彼らに對する聖フランシスの愛情はなほ一つの新しい表現を求めた。また木曜日――主が弟子たちとゝもに最後の晩餐を開いたその日であると思ひながら、彼は一塊のパンを持つて來させた、そしてそれを祝福して、裂いてその片をすべての人々に與へた。「そして私のところへ聖書を持つてきて洗足木曜日の福音を讀んでくれ、」彼は曰つた。「今日は木曜日ではありませぬ、」と彼らの一人は曰つて聞かせた。「さうか、私はまだ木曜日だと思つてゐた、」彼は答へた。書は持つて來られた、そして夜のあけてゆくとき聖フランシスの死の床の上で聖書の言葉はひゞいた、それのなかに

聖フランシスの死

ジョット作

は彼の全生涯と敎へのすべてが總括されてあつた。

『踰越の節のまへにイエスこの世を去りて父のもとに歸るべき時いたれるをしり、世にありし己れの民をすでに愛し終りに至るまで之を愛せり。時に彼ら晩餐の席につく、惡魔はかねてイエスを賣さんとすることをシモンの子イスカリオテのユダの心に發さしめたり、イエス己れの手に父の萬づの物を賜ひしことゝ神より來り神に歸ることゝを知り、晩餐の席を起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰に束ひ、しかして盤に水をいれ弟子の足を濯ひ、その束ひたる手巾にて拭きはじめ、つひにシモン・ペテロに及ぶ。ペテロ彼に曰ひけるは、主よ爾わが足を濯ふか？　イエス答へて曰ひけるは、わが爲すことを爾いま知らず、後にこれを知るべし。ペテロ彼に曰ひけるは、爾たえてわが足を濯ふべからず。イエス答へけるは、もしわれ爾を濯はずば爾はわれと干渉なし。シモン・ペテロ彼にいひけるは、主よ、唯にわが足のみならず手と首をも濯ひたまへ。イエス曰ひけるは、濯ひたるものは足のほか濯ふに及ばず、しかして全く潔し、爾らは潔し、しかれども悉くは潔きものにあらず。これはイエス己れを賣さんとするものゝ誰なるを知る故に悉くは潔きものにあらずと曰へるなり。彼らの足を濯ひしのちその上衣をとり、またすわり、彼らに曰ひけるは、わがなんぢらに行しことを知るか、爾らわれを師と呼びまた主と呼ぶ、なんぢらの謂ふところはよし、われはまことにそれなり。われは爾らの師また主なるになほなんぢらの足を濯ふ、爾らもまたゝがひに足を濯ふべし。われ爾らに例を示せり、こはわが爾らに行しごとくまた爾らにも行さしめんがためなり。』（ヨハ

フランシスがまだ生きてゐた二十四時間のあひだ兄弟らはたれも臥床の側らを離れなかつた。またいくたびか病たびかレオネとアンジェロは「太陽の歌」を彼に歌つて聞かせなければならなかつた——またいくたびか病める人は最後の行を歌つた。「おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹なる死のために。」再び彼は守人(グアルディアノ)に乞うて、最期の時が來るときに着てゐる物を脱せ、そして地の上に裸かで横はつて息を引きとることを許された。

金曜はすぎ土曜(一二二六年十月三日)は來た。醫師は來た、そしてフランシスは問ひをもつて彼を迎へた、いつ永しへの生命への戸口は彼のまへに開かれるであらう? 彼は兄弟たちに、彼の身體の上に灰を撒くことを求めた——「まもなく私は塵と灰にほかならぬであらう。」

くれかたになつて彼は常ならぬ力つよさをもつて歌ひはじめた。それはもはや「太陽の歌」ではなかつたそれはダギデの第百四十二の歌、ラテン譯では、Voce mea ad Dominum clamavi. と始まるそれであつた。十月の夕ぐれははやく落ちかゝり、そしてポルチウンクラの森のなかなる小屋のなかは暗くなつたとき、フランシスは深い靜けさのなかで、呼吸をひそめて耳かたむけてゐる弟子たちのあひだで祈つた——

「わが聲は主を呼ぶわが聲は主に乞ひもとむ。

「われはその顏ばせのみまへにわが歎きをそゝぎ、そのみまへにわが患みを語る。

「わがたましひわがうちにためらふときにも、なんぢはわが道を識りたまへり、人々はわれをとらへむとて、わがゆくみちに罠をかくしぬ。

「われわが右の手に目をそゝぎ、見れど、一人だにわれをしるものなし。われには避けどころなく、またわがたましひをかへりみるひとなし。

「主よ、われなんぢをよぶ、しかして語る、なんぢはわが希望、生けるものゝ地にてわがうくべき分なりと。ねがはくはわがねがひにみこゝろをとめたまへ、われいたく卑くせらたればなり、われをせむるものより助けいだしたまへ、彼らはわれより強ければ。

「ねがはくはわがたましひを獄よりいだしわれに聖名を感謝せしめたまへ、なんぢゆたかにわれをあしらひたまふとき義しき人たちわれを待ちてあらむ。

フラシシスが祈りしたとき庵のなかはまつたく闇くなつた。そして彼の聲が默したときすべては死のごとくに靜かになつた——この聲がもはや再び破ることのない靜寂。アッシジのフランシスの脣はとこしへに閉ぢた、彼は歌ひつゝ永しへのなかに往つた。

けれど世を去つた神の歌人への最後の挨拶として、この時にあたつて家の上また家のまはりに聲たかき思ひかけぬ囀りが聞こえた——それは聖フランシスのよき友だち、雲雀たちが彼らの最後の告別をもたらしたのであつた。[12]

1.「完全の鏡」一一五、一一〇。 2. 同じく、八五。 3. 同じく、七四。
4. 同じく、一〇。 5. 同じく、八七。 6.「完全の鏡」一〇一。
7.「完全の鏡」一二二——一二三
8. 同じく、一〇八、九〇。
9. Boehmer, Analekten s.36—40.
10.「完全の鏡」一二四、一一二、一〇七。「小さき花」三。
11. Celano, Vita prima II. c. VII. c. VIII. Vita secunda II. c. 162. n 214—215
12.「完全の鏡」一一三。

八 終結

第一に聖フランシスの遺骸を見ることを許されたのはヤコバであつた。涙ながらに彼女は師の生命なき身體の上に身を投げて、燃えるやうな涙を流して幾たびも幾たびも死せる聖者の足と手の傷を接吻した。兄弟らとゝもに彼女は一夜のあひだ死せる師の柩のかたはらに通夜し、そして日曜日の曉があけたとき彼女の決心は定められた——彼女はもはやアッシジを去らうと欲しなかつた、そして彼女の生涯の殘りをフランシスが歩みそしてその事業をなした處で費すことを欲した。サン・ダミアノと同じやうに彼女のアッシジの棲家は忠實な兄弟らの集會所となり、そしてあまたの施物は彼女の手を經てフラテ・レオネに、フラテ・エジディオあるひはフラテ・ルフィノに贈られた。サバチェ氏が惟ふごとく彼女がフラテ・レオネの末期に彼の眼を瞑らせたといふことは、憶測以上のものである、彼女みづからは一二七四年に高齢をもつて死んだ。彼女はアッシジのフランチェスコ寺に葬られてそこに眠つてゐる、一つのフレスコ畫には彼女が第三團體の衣を着て、彼女がフランシスのために織つた頭巾を携へてゐる姿を顯はしてゐる、そしてそこの記文はつぎのごとくである、Hic requiescit Jacoba santa n bilisque Rom na（こゝに聖ときローマの貴女ヤコバは眠れり）

日曜の早朝から人々は死せる聖者に第一の譽れをさゝげやうとしてあらゆるところから集まつてきた。聖フランシスの烙印の噂は口から口に流れて傳はつた。そしてそれを見たいと願ふものゝ群集は數へることもできなかつた。僧職たちは嚴そかな行列をしてアッシジから遺骸を携へに下り來り、そして橄欖の枝と點した蠟燭を手に手に携へて、喇叭の響きとそれにつれて起る讃美歌とゝもに、おごそかな葬りの行列は市へ上つて行つた。フランシスがキアラにあたへた約束を果すために、サン・ダミアノを過ぎる途筋を選びそしてこゝで限りなき涙と歎きをもつて姉妹たちは彼らの最愛する導師、師父に最後の告別をした。(二卷の五參照) やがて行列は今はサンタ・キアラの寺のあるところ、むかしのサン・ジョルジオの寺に行き、そこに聖フランチェスコの遺骸は假に、一二三〇年五月二十五日まで葬られた、のちそれはフラテ・エリアの建てた美しいサン・フランチェスコ寺に移された。

昔の傳記著者たちの何人も、この葬りのあひだヤコバ・デ・セッテソリが何處に止まつてゐたかを語らない

彼女が女の身で、僧侶、兄弟ら、軍士からなりたつ行列にともに從つたといふことはまつたく考へられぬことである。我々は彼女が跡にポルチウンクラに止まつてゐたことを信ずることができる。そして大いなる行列がその莊嚴と歌唱とゝもに木々のあひだに隱れゆくとき、彼女は歩みをかへして、フランシスが二十四時間まへまで生活し呼吸をした小屋のなかに入つたであらう。そして恐ろしい空虛さ——死がつねにそのあとに殘す空虛さは彼女の上に迫つた、そしてこのやうな大いなる死のゝちには、いかなるものであつたらう？　たゞいまとなつて彼女は彼女の失つたものをまつたき現實に於いて理解することができた、そして彼女の目にはにはかに人なく暗く思はれるポルチウンクラの小さい禮拜堂に跪づきつゝ、彼女は涙をながして彼——そのなきがらを人々が凱旋の行列をつくつてアシジに運び去り、そしてもはや二たび彼女を「フラテ・ヤコバ」と呼ぶことのできなくなつたそのひとのことを思つた。

——了——

附　錄　一

聖フランシスの最も古き肖像畫。　スピアコなるサグロスペコにある一つのフレスコ畫は保存せられたるもつとも古き肖像として信ぜられてゐる。ある傳說にしたがへば一二二二年に於いて聖フランシスは偉大なる修道院組織の創始者聖ベネディクトウスに對する尊敬のこゝろに動かされて、この人が寂しく神の奉仕にいそしんだ古跡を訪れたといふ。聖フランシスがこの處で寂しい山のなかで過した日々の記憶は愛らしい傳說のなかに生き、そして今日なほそのところの靜かな修道院をなつかしく感ぜしむる。いまなほ小さき園には薔薇が匂ふ、それは聖者が古きむかしにこの處で苦しき抗爭のあひだに己のが罪深き肉を責めた人に對する愛と驚嘆の深き感情から繁みを接吻し、そして十字のしるしをもつて祝福したときに棘の繁みから咲き出でたものであるといふ。その薔薇は聖フランシスが古くそして冷却した宗教團體の組織に與へた新しき生命の象徵である。

その園のすぐかたはらに團體の保護者であり、フランシスを聖別した法王グレゴリオ九世の禮拜堂がある。あるひはこのもつとも親しき、そして權力ある友人の保護によつてフランシスはこゝにはじめて聖とき處に描き現はされたのであらう。未だ聖光をもたず、烙印なしに、"Frater Franciscus"「兄弟フランシ

ス」と記されて、彼は荒縄を帶として長い衣を着、高く尖つた頭巾をつけて立つてゐる、下の方へ延ばした左の手には "Pax huic (domui)" 「この家に平和あれ」と記された札をもち、右手は胸に置かれてゐる。晴れやかに靜かに正面を見てゐる、鬚のブロンドな顏には未だ、後の多くの肖像畫を醜くゝしてゐる禁欲的要素はすこしも見いだされない。やゝ長く細面で、高すぎない額、眞直な力つよい鼻梁、はづか弧形になつてゐる眉のしたにある大きい目、脣の小さい品のいゝ口、そして細い頸とはトマス・デ・チェラノの叙述と一致してゐる。その顏容から內部を讀まうとすることは勿論徒勞であらう、けれどその目と、そしてすこしく開いた口とに於いて法悅的な本質を示さうとしてゐることは見のがされない。容貌に於いてこゝにはフランシスは決して賤しくは見えず、却つて注意を惹くべき氣高さをもつてゐる。けれどこれは當時の畫家が人物を堅苦しく描くことしかできなかつた無能力から說明されよう。この畫の製作の時代はおなじ禮拜堂にある他のフレスコ畫のしたにある記文から定めることができる、それに從へば禮拜堂の壁畫はグレゴリオ九世が法王になつてから二年めに描かれたもので、卽ち一二二八年に、そして恐らくはフランスが七月十六日に聖別せられたよりもまへであらう。いづれにしてもこの肖像は幸ひをもたらす訪問の記念である、それは聖フランシスが家々に步み入るとき呼ぶのをつねとした平和の挨拶の言葉が示してゐる。この繪はたしかに聖フランシスがこの世にもたらしたと信ぜられた一つの春の情調（卷頭に引用されたる「三兄弟の說話」の言葉）のあるものを現はしゐる。(Henry Thode, "Franz von Assisi und die Anfänge der

Kunst der Renaissance in Italien" 2. Aufl. S. 71–73.)

附　錄　二

聖フランシスと貴女「貧しさ」との結婚。　私はこの繪とそしておなじジョットーの「聖フランシス己のが所有を棄て去る」のフレスコ畫とはおなじ內容を、一つは寓喩的に、理想化しつゝ、一つはむしろ寫實的に取り扱つたものであると考へる、そして私としてはこの寓喩畫（アレゴリー）の方をこゝに載せるにふさはしいと思ふ、（「所有を棄て去る」の畫は中村昌樹氏譯のサバテイエ「聖フランチェスコ」に載せられてある）

中央に岩と石のうへに荊棘のなかに聖とき「貧しさ」の痩せた、破れよごれそして一つの繩を帶とした着物を纏つた姿が立つてゐる。彼女――「貧しさ」のうへに薔薇と百合が咲いてゐる。彼女の二つの翼は力なくあたかも破れたるごとくに垂れ、やゝ年老いた表情ある嚴肅な顏には惱みと捨離の痕をとゞめてゐる。しづかな、けれど羞ぢらふ目ざしをもつて彼女はフランシスが、親しくそして愛ふかく彼女にむかつて右側から近づいて彼女の右手の第四指に指環を篏めさせるのを眺めてゐる。二人のあひだに、少しくうしろにキリストは立つて花嫁「貧しさ」の手をフランシスにわたす。彼女に近く右手には二人の女性が立つてゐる、その前に出てゐるのは一つの花環と三つの焰を髮にいただき右手に一つの心臟をもつてゐる、それは愛（カリタス）である。後なるは、いまあたかも「貧しさ」に一つの指環をその左手に與へたやうな手つきをしてゐるのは希（スペ

望である。大きな天使たちの群集はフランシスとそして德たちのうしろに侍つてそして嚴そかに注意ふかくそこに行はれるものを眺めてゐる。中央に、下の方に一つの犬が「貧しさ」にむかつて吠えてゐる、そして一人の男の兒は彼女に石を投げるべく右手をあげてゐる。前景に一人の天使は一人の青年の手をとつて彼にこの嚴そかな式を指し示す、その青年はいまあたかも一人の老いたる乞丐に己のが上衣を與へつゝある。それに對應して右手の方には他の一人の天使は鷹を手に据ゑてゐる一人の貴とき人を、フランシスの模範にしたがへと動かさうとして、けれど徒勞である、その人はあだかも輕蔑するごとく手を振つてゐる。彼の二人の仲間もまた感動してゐない。その一人は歩み去らうとしつゝ、けれどひそかに顧みて、そして憂はしげに双手をもつて彼の金嚢を抱きしめる。そのうしろにゐる他の一人、僧は彼を冷笑の目で眺めてゐるらしく、そして兩手で胸に妬みを抱く。中央に高く二人の天使が飛んで昇らうとする、その左手のは一つの衣と嚢とをもち、右の方のは一つの塔のごとき建物と園の模型を運ぶ、神の御手はそのさゝげたものを受くべく上から延ばされてゐる。

この「貧しさ」の寓喩畫はアッシジの聖フランチエスコ寺の天井を飾つたジョットーの四つの寓喩畫中もつともすぐれたものである。その畫面には戯曲的經過あり、そしてその經過がもつとも具象的に觀者の心に直接に理解される。この時代の詩歌に他方には具體的な存在物としての「愛」(アモーレ)に逢ひ、また教へられ、導かるゝ過程を歌つたものが多いとおなじやうに、けれどそれよりは少ないとはいへ、一つの存在物として「貧しさ」が人格化された姿として現はれてくるものは少なくない、ヤコポネ・ダ・トーディの詩にンテの神曲、天堂界第十一歌五八―八四行に、またジョットーその人の詩にも、見られる。ジョットーの詩(そのイギリス譯はロセッテイ "Early Italian Poets" のなかに載せられてゐる)はむしろ貧しさを非難するものであるが、けれど主キリストが貧しさを教へたまふことに存する深き心は知られるとしても言葉に語らるべきものではないと曰ふところに畫家の深い敬虔は現はれ、そして「貧しさ」の寓喩畫を充してゐる精神的な力を理解せしめるものがある。(Thode, op. cit. S. 521—532.)

目次

第一編　寺院を建つる人……一
一　病癒えたる人……三
二　幼時、青年時代……九
三　時代の歴史……一三
四　フランシス軍人となる……一六
五　悔い改め……二二
六　サン・ダミアノ……四八
七　家を去る……五五
第二編　福音を傳ふる人……七七
一　最初の弟子たち……七九
二　團體の設立……一〇〇
三　リヴオ・トルト……一二六

四　ボルチウンクラと初期の弟子たち……一三九
五　聖キアラとサン・ダミアノ……一六四

第三編　神の歌人……一九五

一　小鳥の説教……一九五
二　傳道旅行……二〇一
三　ボルチウンクラの免罪……二三一
四　集會と布教區劃……二五五
五　カルデナレ・ウゴリノ……二四〇
六　異邦傳道……二五三
七　異邦傳道と蓆の集會……二六四
八　掟と戒め……二七七
九　聖フランシスと學問……二九三
十　學識あるフランシスカンと第三團體……三〇六
十一　エリア・ダ・コルトナと決定せる掟……三一九

十二　最後のローマ行きとグレッチオの馬槽……三三〇

第四編　隱者フランシス……三四一

一　著作……三四一
二　靈的生活……三五一
三　眞個の弟子……三一〇
四　ラ・ヴェルナと烙印……三七五
五　兄弟たちへの告別……三八九
六　自然美を愛する人フランシス……三九七
七　フランシスの最後の手書、病、死……四一〇
八　終結……四三六

附記。原著の一つの誇りなるべき立派な、そして有益な書史的研究の部分はこの私の飜譯には省略されてゐる、それは聖フランシスの歴史が宗教史、教會史、および一般文化史學の一つのテーマである西邦に於いては、若干の創見や論爭に對する準備として缺くべからざるものであり、そして新しき見解を熱心なる研究者が抱きそして熟させるための導びきに役だつものであるが、それに擧げられてある諸書の多くは日本で見ることは殆んど、もしくは全たく不可能なものであること、かつ日本に於ける興味の性質を顧慮して爲されたる私の省略は理由なきものではないであらうと信ずる。

大正六年三月十五日印刷
大正六年三月十八日發行

（定價金壹圓四拾錢）

聖フランシス

翻譯者　久保正夫

發行者　東京市牛込區矢來町中の丸十二番地　佐藤義亮

發行所　東京牛込區矢來町中の丸
新潮社
電話番町（八〇九番　八九九番）
振替東京一七四二番

印刷所　東京市神田宮本町五
電話下谷三二八九番
新潮社印刷部
（印刷者）高橋治一

——是れみいじき信仰の書也限りなく美くしき藝術品也。

文學博士 姉崎正治氏序 久保正夫氏譯

■聖フランシスの小さき花

（初版賣切）再版發賣

この書は、アッシジの聖者が靈的生活の尊さと、信仰の強さと、愛の熱情の美くしさとを描けるものにして、興味深く藝術的の匂高き小話の、いづれも深甚の意味を寓して、敬虔にして熱烈なる愛と信とを語れるもの丶幾十篇を主として成り、第二のバイブルとして西歐の人々に愛誦せられつ丶あるものも也。原著者の定かならぬと云ふにも、却つて其の經典的權威のかりそめならぬを見る可く、ザバティエ、ヨエルゲンセンなどの此の聖者を研究せる、皆此の書によれるは人の知る所ならむ。

▼特製大版美本
▼紙數三百五十頁
▼定價一圓二十錢
▼郵送料八錢

姉崎文學博士

「――の序中に曰く、新しい優しい譯文で「小さき花」を讀みもて行けば、その美はしい「小さき花」の生え出たオンブリアの野山に心は引かれ行く。オリブの絲滴る下には薄紅の馬ごやしが咲く。この草と花と、皆曾ては「貧しき者」を以て自ら任じた聖者と彼が兄弟等の素足で歩んだ跡でないか。仰げば碧空に聳ゆるスバシオの山、俯しては水澄むラスメネの湖、是れ皆彼の聖者が神に祈り、主の御旨に接した跡である。彼れが癩病患者の救ひを始めた小屋も、衣服を投げ出して裸體のまゝの己れを神に捧げ始めたダミアノの堂も、惡魔の試みに抗して靜かに祈念に沈んだカルツェリの庵室も、此等曾遊の跡は、「小さき花」を讀むと共に歴々眼前に髣髴する……「小さき花」は「フランシス」と其門人等との天眞爛漫な生活の記錄である。そして其物語の内容のみならず、筆つきに於ても、無邪氣で徹底して、柔かで然かも力があり、楚々人を動かす點に於てもフランシスの精神を能く代表してゐる。……**フランシスを知るには**第一「小さき花」を以て始めるが至當である。久保君が「小さき花」の飜譯を出したのは、日本に於けるフランシス研究の最も意味あり趣味ある事業である。……」

□トルストイ著□

阿部次郎氏譯

光あるうち 光の中に歩め

■トルストイの宗教小說

聖書中の一句を以て題せる斯の小說は、初代基督教に關する見解を最も平明に簡樸に、而して感情を以て美しく描き成せるものにして、又、その戀愛觀結婚觀を端的に知ることを得べく、夙にトルストイ作中の異彩と稱せらる。これを宗教の藝術化といはんか、將た又藝術の宗教化といはんか。一面宗教界の偉人にして一面文藝界の王者たる作者の面目は、最もよく此の篇に發揮せられたるなり。これを雄篇大作に充てる其の集に見れば、洵に寥々たる一短篇に過ぎずと雖も、萬道の光、一點に凝つてこゝに赫灼たる概あるもの、宗教小說として斯くの如く意味深きものあることなし。

▼總六號袖珍型
▼紙數二百頁
▼定價三拾五錢
▼送料四錢

■全人類の惱みを代表せる心靈の大苦悶錄

我が懺悔

相馬御風氏譯

トルストイ翁こゝに五十、念々轉た人間の眞理を索めて止まず、遂に藝術の榮光に輝ける其の前生涯を否定して、宗教的精神の途に上らんとし、敬虔の涙を以て昨の非を懺悔す。是れ實に全人類の惱みを代表せる偉大なる心靈の苦悶史にして、トルストイの著作頗る多しと雖も、最も赤裸々に其の眞面目を露呈せるもの、此書に若くは無し。彼が他の著作に現はれたる凡百の思想と感情とは、悉く此の一卷に凝結す。相馬御風氏、トルストイに傾倒すること茲に年有り。今感激の餘を以て新譯を全うし、附するに「廻轉期のトルストイ」なる一大論文を以てす。必讀の書なること、何ぞまた言ふを須ゐんや。

□洋布製美本
□定價七拾錢
□送料八錢

▪トルストイ叢書▪

（第一）**我が宗教**　生田長江譯

杜翁著書中最重要なるもの丶一也。彼が獨自の立場より近世の誤れる基督教を是正し、眞の信仰とは何ぞやを說くに、其半生の心血を濺ぎたる、にがく苦しき體驗を以てせるもの。

（第二）**イワン・イリイッチの死**（附）主人と下男　高架索の捕虜　福士幸二郎譯

平凡なる一官吏の生涯を通じて、「死」の問題を取扱へる小說也。魂のうめきをさながらに聞くが如き沈痛なる作品にして、杜翁の數多き短篇中、最も傑出せるものと稱せらる。

（第三）**幼年・少年**　江馬修譯

是れトルストイ自ら其の生ひ立ちを記るせる傑作。偉大なる靈魂の芽生と成長とは、嚴密靈活なる自己解剖の筆によりて遺憾なく描き盡くさる。眞に是れ萬人必ず讀む可きの書也。

（第四）**ハヂ・ムラート**　相馬御風譯

杜翁遺稿の一。藝術的價値に於て自餘の遺著を遙に凌駕する傑作也。材を露國が高架索を征服したる當時にとり、回々教の一勇士を主人公として描ける東洋的色彩の豐かなる小說

（第五）**闇の力**（附）——生ける屍——　中村吉藏譯

是れ翁の代表的戲曲也。無知無漸、野獸の如き下層農民の生活に材をとり、姦通墮胎毒殺等あらゆる罪惡のどん底より、次第に良心に目ざめゆく靈魂の曙を描ける最も高名なる作

（第六）**コサック**　廣津和郎譯

若き砲兵士官たるトルストイが戎衣に祕めたる彩管を揮つて、風光のすぐれたると女の美くしきとを以て名高き高架索の自然と人事を活寫せるもの。翁全作中最も重要なるもの也。

▪總洋布最上製▪一冊七十錢▪送料八錢づゝ

大トルストイが萬人の爲めに書きたる教訓物語

トルストイ小話文庫

▼小形特製美本
▼定價二十五錢
▼送料一冊四錢

誰が讀んでも非常に面白い。そして讀み終つて深く〳〵考へさせられるト翁獨特の訓話の集。西洋では何冊數百萬部を賣盡したとの事日本でも有らゆる階級の人々に讀んで貰ひたいと思ひ、體裁や定價などにも聊か心を用ゐた。これまでに無い意味深き新叢書である。

（1）▪蠟燭と二老人（再版）昇曙夢譯

（2）▪イワンの馬鹿（新刊）福士幸次郎譯

（3）▪人はだれだけの土地を要する乎（新刊）久保正夫譯

（4）▪壺のアリョーシャ（近刊）阿部次郎譯

トルストイ著

▪人生論▪　相馬御風氏譯

杜翁の根本思想は、本篇に於て遺憾なく窺ふことを得べし。世の所謂哲學書の乾燥無味なると迄に其の選を異にし、縱橫の比喩を交へながら、極めて平明、趣味饒かなる筆を以て說き去り說き來る。まさに是れ人生最高の書にして、また最貴の書也。

▪性慾論▪　相馬御風氏譯

性慾は最も嚴肅にして又最も痛切なる事實也。曠世の大偉人トルストイは、此の問題につきて奈何に感受し、はた奈何に解釋せるか。『人生論』と共に何人も敎へらるゝところ多かる可きは實に此一篇たること、また言を須ゐざる也。

一冊改版　一冊五錢　發行　送料四錢

ニイチエ全集

生田長江譯

數年來頓に物興し來れる外國文學の輸入事業も、既に漫然たる抄出的飜譯の時代を經過して、まさに嚴肅清實なる全集刊行の時代に入らむとす。而してニイチエの如きは、近代の文藝思想界の王者として、トルストイと共に最も眞摯の研鑽を捧げらる可きもの、即ち此全集譯を公にする所以也。

第第一二編編

人間的な餘りに人間的な

全二冊 完了 鴻洋布上製極美本 總紙數一千六十頁 一冊各一圓六十錢 送料一冊各十二錢

別に題して『自由思想家の僞の書册』と云ふ。人間的なる餘りに人間的なる現實の冷光を以て、理想的なる幻影を照破し、酷烈なる偶像破壞の鐵槌を打ち下したるものはこれ也。著者自ら曰年に回顧していへらく、『予は此書を以て予の本性に合はざるものより脫却せり』と。ニイチエが嚴密にニイチエらしき思想と表白とに到達したる第一の所產はこれ也。全篇を通じて、珠玉の如く、匕首の如く、火藥の如きニイチエ特の警語と箴言とより成る。その箴言と警語との、如何に簡潔にして明快なるかを、如何に尖鋭にして辛辣なるかを、如何に激越にして暴烈なるかを見よ。

ニイチエ著 森鷗外氏長序 生田長江氏譯

ツァラトゥストラ（第六版）

賈一圓八十錢 郵送料十二錢

譯は生田氏が彫心鏤骨の苦心になり、よく原文の精神風格を傳へたり。

ルッソオ著 生田長江 大杉榮氏共譯

懺悔錄（第三版）

全二冊 一冊各九十錢づゝ 送料一冊八錢づゝ

ダスタエーフスキイ著 中村白葉氏露文直接譯

罪と罰（第三版）

小形全二冊 總定價一圓五十錢 郵送料八錢

ストリンドベルヒ著 阿部次郎 江馬修氏共譯

赤い部屋（第二版）

定價一圓六十錢 送料八錢

ダアヰン著 大杉榮氏譯

種の起原（第三版）

小形全二冊 總定價一圓五十錢 送料八錢

325
499

終